

---

# クライムズクライシス

武上 湫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クライムズ クライシス

### 【Nコード】

N6903C

### 【作者名】

武上 湫

### 【あらすじ】

アメリカの大富豪テッドマクシミリアン。心筋梗塞を患った彼があこの世に旅立った。弁護士が開いた遺書に書かれていたのはオンラインゲームクライムズを最初にクリアした者に全財産を与えるというものだった。しかし、この遺産にはとんでもない物が含まれていた！。フェア公正とは何か？。テッドマクシミリアンが仕掛けた不正に対する抗議がゲームスタートと共に大事件に発展する！！

## 読者の皆さんへと前書き

ー読者の皆さんに

作者武上溪は個人的事情により携帯端末で、Eメール機能を使って執筆投稿を行っています。前2作のアクセスの6割がパソコンからと言う事で、ご迷惑をおかけしています。誠に勝手では御座いますが、今後も携帯のEメール機能での執筆投稿を変える事はできません。

パソコンユーザーの方には申し訳ありませんが、ご容赦下さい。今後とも、武上溪を応援していただけますよう、よろしく願います。

ー献辞

管理者のウメさんに

PANZER FRONTのメインプログラマーさんに  
(クライムズは当初タンクフォーミュラーワンと言う戦車レースゲームでした)

本作を書く原動力となったダウンヒルズ タイフーンアイにアクセスして下さった皆さんに

能登島の服装の参考にさせてもらった

CGアーティストと言いながら動かなくなったパソコンの復旧や

バグ退治 納期のなくなった仕事の帳尻合わせに明け暮れる ス  
ーパーマンのような 兄に  
敬意を込めて

ガンで直腸と尿道を失いながらも  
軟式テニスの指導者としてラケットを握っている  
ほぼ サイボーグのような父に  
それを支える 母に  
小説を遥かに超える驚きを持って  
本作品を捧げる

クライムズ クライシス

ー前書き

クライムズとは、主人公が作った登山シミュレーションゲームの名  
前です。クライムズは登はん。クライシスは危機。日本語にすると  
登はん危機となりますが、登はんと言う言葉が馴染みのない言葉な  
のでクライムズ クライシスとさせて頂きました。

今作3作目と言う事で、前2作が女性を主人公としているので、今  
作は男性の主人公にしようと考えました。また、前作のタイフーン  
アイから3人の登場人物をゲスト出演させています。ストーリー展  
開にはほとんど関係させないような役割を持たせました。

また、タイフーンアイで書き忘れていた情報も少し盛り込みました  
ので、タイフーンアイを読んだ方には楽しんで貰えると思います。  
読まれていない方でも違和感のないように配慮したつもりです。  
本作は、公正フェアを主題としています。フェアと言うのはルール

を守ってプレイすると言う意味が一般的ですが、もつと拡げて正々堂々と戦うと言う意味でも使われます。

しかしながら、アマチュアのスポーツ競技や家庭で行われるTVゲームなどのように、誰が勝っても問題が起こらないと言う場合にはフェアは機能するように思います。しかし、プロのスポーツやオリンピックのような企業が絡むもの、選挙のようなものになってくると、フェアは限界を見せてしまうように思います。戦争も国家間の競技と捉えるなら、フェアと言う概念が入り込む余地はありません。本作は、ある人物が勝つと致命的な結果が生じる場合、アンフェアで有っても、その人物に勝つのは正当であると考える立場のアメリカ大統領と、たとえそうであってもフェアでなければならぬとするテッド・マクシミリアンの立場を軸としました。

その争いに巻き込まれるのが能登島です。そして、そうしたイデオロギーを権力と財力で振りかざし、関係のない一般市民を争いの渦の中に巻き込んでゆくエゴに対して、怒りをぶつけながら挑んでゆくのが西堀栄一と椎名美花、大友康洋です。そして、客観的な視点を山際厚を通じて描きました。

主題に対する作者の想いは後書きで紹介するつもりです。もつとも、こういった事を抜きにして楽しんで貰っても問題ありません。

是非ともクライムズにエントリーを。  
ゲームを楽しんで下さい。

主題歌として、YUIのRollingstarを聞いてみてください。盛り上がると思います。

2007年9月

武上溪



## ―第1面 ニューグリップタイヤ

―第1面ニューグリップタイヤ

愛知県名古屋駅から地下鉄東山線で一駅。伏見駅の一番出口を出て100m程のビル3階にあるゲームソフト制作会社、ニューグリップタイヤ。年に2〜3件タイヤの注文が舞い込む、紛らわしい名前前の会社。

会社発足から5年。

創立時デジタル地図と交通情報をリアルタイムで連動させ、住宅地図レベルでのオンラインレースゲームで、そこそこのヒットを放った。

しかし、自分達の車で実際の道路を使って、このゲームをプレイする連中が現れ、警察と被害に遭った住民の圧力でオンラインゲームは閉鎖の憂き目にあつた。

会社幹部はシミュレーションゲームにアレルギーを起こし、RPGに路線変更して、なんとか業界のトップテンを維持している。

能登島秀彦のとうま ひでひこは、もともとシミュレーションゲームをやりたくて、例のゲームをヒットさせたニューグリップタイヤの2年目に入社した。入社時は事件は起こっておらずシミュレーションゲーム全盛だった。しかし事件後は一切のシミュレーションゲーム開発は却下になった。能登島は企画としてクライムズを提出したが、石川開発部長の

「これは売れそうにないね。」

と言う一言で企画会議に行くまでもなく、企画書は能登島の作業ブースに戻ってきた。デスクで戻ってきた企画書を眺めている能登島の所に西堀栄一がキャスター椅子ごと入ってきた。

「シミュレーションのシの字だけで判断してんじゃないの?。部長。

「

「一応RPGで出してんだけど。」

「これが？。シミュレーションだよ。最高に面白いと思うんだけど？。」

「西堀の面白いは、別の意味だからな。」

「面白いよ。登る山が噴火中で、いつ登れるかわからないなんて、食いつき半端じゃないよ。部長が製品にしないってんならさ…俺達で作っちゃっおうぜ。ホームペでオンラインにすれば、会社の連中でプレイできるよ。結構、みんな期待してたんだぜ。」

「部長が却下するのをか？」

「ノトだつて、わかつてたんじゃないのか？」

「これ以上、睡眠時間削つたら、起きてる時間が24時間超えちゃうだろうが。」

「パーツに分けて作れば問題ないよ。」

「やるかな。」

このひと言が、とんでもない事件の入り口だった。が、それは半年後の話であり、能登島は新しいゲーム「クライムズ」を早くプレイしたくてウズウズしている、普通のゲームクリエイターだった。

能登島の退社時間は決まっていなかった。

会社に居てもしょうがない時が退社時間になる。例えば並行している作業で他が遅れているか、能登島が突出してしまった場合とか…。そうでなければ退社時間は訪れない。そして、しばしば作業は自宅に持ち込まれる。理由は会社のハードやソフトよりも自宅のそのの方が遥かに上だからだ。

自宅で良好なハードやソフトが申請されて切り替えられる。常に自宅の方が速くてレベルが上になる。聞けばビックリするような月給の割に質素な暮らしは、こうしたカラクリにある。そして自宅で作業するための帰宅を退社とは呼ばない。ボランティアに行くと呼ば



れる。この作業に給料は支払われない。これに異を唱える者は、この世界から消えてゆく。会社のハードやソフトだけで作業された製品は、品質が低くて使えないと言われてしまうから…。

能登島は新作RPGのディスクを鞆に入れて、石川部長にメールを打った。

「ボランテアに行ってください。」

数メートル先で石川部長が返信する。

「どれくらいだ?。」

「15時間程度。」

「えらく速いな。」

「今使ってるソフトは速くて使えますよ。今度申請しますから。」

「月末はよせ。月始めにしてください。」

「わかりました。」

能登島は立ち上がるとガンダムグッズのアナハイムエレクトロニクスのキャップを被って、出口のスロットにIDカードを通した。ピツと音がすると、それぞれの作業ブースから手だけが出て振られた。ドアが開き能登島は開発部の外に出た。

かかとが崩壊寸前のGTホーキンスのスニーカーに、リーバイス。季節に関係なく一年中着ているハワイ土産のアロハシャツ。冬はこれの上に陸自の友達が横流ししてくれた戦車兵の防寒服を着る。今は夏なので、それは作業ブースの机の下のダンボールに広辞苑と共に入っている。

能登島はこのボランテアをもう一人の人物にメールで知らせていた。大学時代の彼女、しいなみか椎名実花。

地下鉄東山線伏見駅の改札前で、彼女は勝負服とおぼしきファッションとメイクで能登島を待ち受けていた。

「どれくらい時間あるの?。」

「15時間。作業は7時間あれば楽勝だ。市販のソフトいじくつたら、15時間が7時間になった。本当はいじくつちゃいけないから、内緒だぜ。」

「時間つくってくれたんだ…。」

実花は目を伏せて顔を赤らめた。

「俺的には事故だよ。8時間会社に戻れないし、外も歩けない…。それにしてもどうした？。ちゃんと納得してくれたはずだぜ？。」  
能登島はゲームクリエイターになるにあたって、実花とは別れていた。

実花は背筋を伸ばし、顔をあげて券売機の方を見て言った。

「…考えた。ノト君の事。私にはノト君以外考えられない。」

「また同じ話を俺はするわけだ。まあ、そう言うのは嫌いじゃないけどさ。シイナはさ、最高にかわいいし、優しいし、気配りもできる。ファッションセンスも最高。しかもナイスバディだ。料理も俺の好みを知ってるし、掃除も大好き。手袋もセーターも編めるし、子供好き。だったらゲームクリエイターなんて宗教をやってる男じゃなくて、ちゃんと彼氏の役目を果たして、お金もちゃんと入れてくれる男を選択すべきだ。俺は家に帰ってこないし、収入はソフトとハードに使っちゃう。誕生日も結婚記念日もゴールデンウィークもお盆休みもクリスマスも宗旨宗派が違うから関係ない。その上にバージョンアップなんてお布施も必要だ。こんな奴の彼女である意味はあると思う。結婚したら、契約違反だよ。」

前回はこれで実花を納得させた。だが、今回は怯まなかった。実花は能登島の方を向いて、目を見つめた。

「…それでいいよ。何故だかわかる？。ノト君のゲームは優しいし、生きる勇気をくれる。…私は、ノト君のゲームに何度も勇気をもらった。私はノト君のゲームがあるから生きてゆける。ノト君に何もしてもらわなくなったら、ノト君がゲームを作ってくれてプレイできればそれでいい。そのためなら、働いてノト君の子供を育てみせる。…ホームページの仕事を始めたの。少しづつだけお金も入ってくるようになった。…なんとかできると思う。」

能登島は敗北宣言をしなければならなかった。実花の仕事は能登島も知っていた。教えたわけでもないのに、プロの目から見てもビジ

ネス的に見ても有望で才能にあふれていた。

「来年のクリスマスまでテスト期間を設定させて欲しい。」

「テスト期間?。」

能登島はポケットからキーをとりだして実花の手の上に置いた。

「アパートのスペアキーだ。来年のクリスマスまで実花の気持ちが変わらなかつたら婚姻届を出す。ただしセックスはなしだ。子供はそれまでつくらない。耐えられる?。」

「耐えるよ。耐えてみせるよ。」

能登島は目を閉じて首を振った。こんな馬鹿な提案を受け入れられるのは、世界でこの娘だけだと能登島は感動していた。能登島は敗北宣言を発した。

「ならばスタートだ。改札口にエントリを。」

実花がレスキューとなつて能登島を救う事を2人はまだ知らない。

もしキーを渡さなければ能登島の命は露と消えていた事を…。

第2面に続く

## 1 第2面 クライムズ

### 第2面 クライムズ

ソフトウェアをいじくった事で生じた8時間を使って、能登島はクライムズのプログラムを始めた。

ゲームの概要はこんな感じだ。

日本列島の南海上、父島母島の近海に海底火山の爆発で新島が隆起。強烈に高さを増し、チョモランマの標高を上回り、9千メートルジャストの世界最高峰となった。この新世界最高峰新K-0ノトジマ峰の初登頂を目指すのがゲームの目的となっている。ただしゲームのスタート時は、この新島は噴火中で登る事ができない。海底火山のデータを元に行っているため、能登島でさえいつ噴火が終わるのかわからない。またゲーム内のバーチャル日本政府が、いつ島への上陸と登山を許可するかも、過去の日本政府の対応をデータ化して元に行っているため、外部からのコントロールはきかないようになっていいる。ゲーム内部でプレイヤーはバーチャル日本政府と闘わなければならない。また、日本政府の許可を得ないで登る事も可能になっている。この場合はバーチャル自衛隊と交戦可能だ。プレイヤーが例えばアメリカ人であれば、バーチャルアメリカ政府を市民運動で動かし、アメリカ軍を投入する事も可能になっている。もちろん政治的圧力をかける方法もある。ただし、こういった非合法で暴力的な方法は他のプレイヤーが団結して阻止する事もできる。では、少なくとも噴火が終息

するまでプレイヤーは何をするのか？。登山技術の修得と資金集めやスポンサーの獲得、さらに登山に必要な資材集めや開発などをやるようになっていいる。ゲームスタート時に、名前や性別の他に国籍

や現住所、声紋データ、アクセス端末の個体識別番号も要求される。それによってプレイヤーのゲーム内国籍が決定され、その国内でプレイが開始される。国外でプレイする場合は旅行費用やパスポートをゲーム内で用意しなければならない。スタート時、生活費しかまかなえないアルバイトをしているプレイヤーは、自国内で資金集めからスタートしないと、自国の山に登って登山技術の修得もできない。また、登山技術の修得にはリスクがある。山で死亡すると2度とゲームに戻れない。エントリー時に要求された個人情報やチップをクされ、ゲーム内死亡と認識されてあなたは死亡してしまいますと言われてしまう。再エントリーにはPCを変え、ゲームにエントリーしていない友達の声紋データと住所と名前を借りなければならない。しかし、プレイヤーはマイクの音声入力によって会話しなければならない。自動で声紋チップが行われ、クロと出れば、再びゲーム内から追放されてしま

う。架空の個人情報も自動で外部とアクセスして同じ事になる。フェアにプレイしないプレイヤーには、非情なゲーム中断とセーブデータ消去が待ち受けている。また、バーチャル日本政府は日本国籍のプレイヤーを優先してくる。外国籍プレイヤーは、このアンフェアを自国政府を動かして是正しなければならない。言ってみれば、ゲーム内はアンフェアに満ち満ちている。しかしそれをプレイヤー達が正してゆく事が可能になっている。そして登山自体がどうなるのかわからない。山はまだ形成中で地図のつくりようがない。

このクライムズのテスト版は、ホームページ上で公開されていて、登山出来るようになったバージョンも公開されている。会社の同僚やネット上の知り合いには、その自由度に関する評価は高かった。海外の日本語がわかる人達もこのゲームの評価は高かった。ゲーム内に通訳や翻訳者が設定されていて、彼らによって日本語が解らなくてもバーチャル日本政府と交渉ができる点などが評価された。

ただし、プレイヤーのほとんどが、わがままにプレイした場合に、世界大戦にまで発展してしまう部分には批判と危惧が集中した。能

登島はそれに対して、ゲーム内で自分達の愚かさ加減を体験するのも大切だとコメントした。

批判は収まった。ゲーム内で戦争が起こって、プレイヤー達が死亡すればゲームから排除されてしまうのは明白だからだ。平和でなければ登頂は不可能なのだ。そして不特定多数が参加できるこのゲームは、平和を保つ事が困難になると予想されていた。とんでもない奴らは必ずいるからだ。彼らがゲーム自体をハッキングする可能性もある。能登島は自分で考えた対ハッキング用のファイアーウォールをゲーム内に置いた。そのファイアーウォールこそがバーチャル日本政府だ。アンフェアに対する死刑執行人とも言うべき、このバーチャル日本政府が機能するかどうかが能登島の最大の関心事だった。そして完全に機能する事によって、ゲームは現実の世界に飛び火してゆく。しかしながら、アメリカの大富豪テッド マクシミリアンがこのゲームのテスト版をプレイしてなければ、能登島の仲間だけの単なるゲームに過ぎなかったのだが…。

第3面につづく

### ―第3面プレイスタート

#### ―第3面 プレイスタート

椎名美花が能登島のアパートに移ってから、半年が過ぎた。能登島のアパートで寝起きし、ホームページとブログの仕事をするために、自分のアパートに出勤すると言う生活だった。能登島と居る時は、必ずクライムズの仕事を横で見ている。

「すごいねコレ。こんなのプレイする人居るの?。」

「俺の友達は、こんなじゃないと納得してくれないんだよ。シイナにはシビアすぎるか?これは。」

「無理。ノト君が守ってくれないと、私なんかすぐ死んじゃうよ。」

「本気か?。俺はシイナが最大のライバルになると思ってたんだけどな...だから、同じパーティーで登ろうってたくらんでるんだけど。」

「そうね。やりようは有るけど、ノト君と一緒に登って欲しいって言われたら...断れないよ。」

「ゲームに情けは禁物だぜ。」

「だって。ゲームの中でだって、ノト君を死なせる訳にはいかないもん。」

「でたな本音が。自信満々じゃないかよ。シイナがゲームの中でミスするなんて有り得ないよ。」

美花は、ゲームの本質を一瞬で見抜く力を持っているように、能登島には思えた。大学時代の能登島のゲームを、最初にクリアする

のは必ず美花だった。一度攻略法を教えるんじゃないかと言う疑惑が持ち上がったが、そうでない事は能登島が一番よく知っていた。そして、美花は能登島のゲーム以外はプレイしなかった。一度理由を尋ねると、つまらないからと答えが返ってきた。

「ようし。これでホームページに繋げるぜ。ゲームスタートだ。」  
能登島は、ホームページで予告した時間に、ゲームスタートするよう最後に作業を終えた。そして、ゲームはスタートした。

…いきなりだった。

バーチャル日本政府が声明を発表した。

「アクセス数が1万件を越えた為、ゲームのエントリーを中止しました。」

「何が起こった?。」

冷静な能登島の顔に、見た事もないパニックの表情が浮かぶのを見て、美花はとてつもない事が起きたと感じた。

「このゲームを知ってるのは、せいぜい3000人程度のはずだ…。何かニュースに出てないか?。」

能登島は、別のパソコンを起動してニュースのサイトにアクセスした。

そこに答えがあった。

「日本時間8月19日21時30分。アメリカの大富豪として知られるテッド マクシミリアン氏79才が心筋梗塞により死亡。200兆ドル以上と言われる遺産の行方が明らかに。日本人ゲームクリエイター ヒデヒコ ノトジマ氏のホームページ上のオンラインゲーム「クライムズ」で初登頂した人物に、全遺産の権利が与えられるとの遺書の内容が弁護士によって明らかに。クライムズは、8月20日午前0時を持ってスタートされる模様。」



「なんでクライムズなんだよ。知らねえぞテッド　マクシミリアンなんて。」

それに対して、美花はサラッと答えた。

「私知ってるよ。不正が起こらない、新しい電子投票システムを開発した会社のオーナー。そのシステムの名前がフェアプレイって名前でも突然、役員会でオーナー辞めさせられて、何か大統領選挙の投票で不正が有ったんじゃないかって…共同通信かなんかのフラッシュニュースで見た。一回きりだけどね。」

「それは、いつ?。」

「去年くらいかな。アメリカの大統領選挙の後くらい。」

能登島の顔に恐怖が走った。

「冗談じゃねえぞ。美花。帰るんだ。タクシー呼んでやる。」

「何なの?。」

「何か考えてるヒマはねえよ。アメリカ、投票、大統領選挙、不正と来たら、命が危ないって事だ。」

「大げさだよ。」

そう言う美花を無視して、能登島は携帯でタクシー会社を呼び出した。

「3分で来る。すぐに出るんだ。」

「ノト君は?。」

「俺は、なんとかホームページを閉鎖してみる。多分駄目だろうけど…。ゲームには入り込めないと思うけど、ホームページは駄目だ。」

「

美花の腕をつかんで、能登島はアパートの外に引っ張って行った。

タクシーがやって来た。

「いいか。西堀栄一って奴に、後の事を頼んどくから、西堀栄一の言うとおりにするんだ。いいか?。美花。」

能登島はタクシーに美花を押し込み、運転手に行き先を叫ぶと、アパートに駆け戻って行った。

「どうしました?。」

運転手がいぶかしげに聞いた。

「急いで、車を出して下さい。」  
タクシー運転手は、仕方なく車を出した。

その日は自分のアパートで寝て、翌日午前中は仕事をして、昼になった。美花は、単なるホームページ炎上くらいに思っていた。

部屋を出て、栄のデパ地下でカレーの材料を買うと、能登島の会社のある伏見に向かった。

地下鉄東山線伏見駅の改札を抜けて、1番出口に向かうと、通路の壁に背をもたせかけ、男が足を投げ出して座っていた。右頬に殴られたようなアザが見えた。手に能登島のかぶっているのと同じ、アナハイムエレクトロニクスのキャップが握られていた。

「ニューグリップタイヤの方ですか？」

美花は、男に声を掛けた。男はハツとした顔で美花を見た。

「椎名さん？」

「はい。」

「急いで！」

男は突然ハネ起きた。キャップをかぶり、左手を差し出した。手のひらに、地下鉄の切符が2枚有った。

「改札を。地下鉄に乗るんだ。」

美花は訳もわからないまま、出て来た改札を通った。

地下鉄が来るまで、男は辺りを見回して、何かを警戒していた。

地下鉄に乗っても、男は周りをうかがうのを止めなかった。名古屋駅に着くと、男は美花を、JRではなく私鉄の名鉄の駅に引っ張って行った。男が事情を話し始めたのは、名鉄電車が一宮を過ぎてからだった。

「椎名さんの友達に、高宮先生と言う人はいる？」

「ええ。高宮愛は、中学からの友達ですけど……。」

「能登島の指示で、そこに逃げ込めって事です。もう、高宮先生の

了解はとつてあるらしいです。」

美花は不安を募らせて聞いた。

「何かあつたんですか？。あなたのお名前は？」

「…すみません。西堀栄一と言います。能登島の同期の同僚です。午前1時頃、ファックスが能登島から来ました。ファックスには、数字の行列と、一番上にこのファックスと広辞苑を持って逃げると書かれてました。数字の行列は、僕らの間ではお馴染みの暗号で、広辞苑を使って解けるようになってます。僕はとっさに、能登島のブースから広辞苑を持って、みんな逃げると叫んで、フロアを出ました。おそらく…窓ガラスを割って、何者かが開発部のフロアに飛び込んで来る音が聞こえました。僕は、廊下にあるトイレの窓から隣のビルの非常階段に飛び移ったんですが…その階段を降りる時に、転んでしまつてこの様です。自宅に戻つて、暗号を広辞苑で解くと、あなたへの指示が有りました。」

「能登島はどうなつたんです？。」

「わかりません。携帯もパソコンも使うなどありません。あなたが伏見駅に来るだろうと予測してありました。高宮先生と言う方の部屋番号はわかりますか？。」

「ええ。705でボタンを押せば、部屋につながつて、部屋から口ツクを解除してくれるはずです。」

電車は終点の名鉄岐阜駅に入った。

西堀は、歩くのがつらそうに見えた。改札を出ると、横幅のある長い階段を降りなければならぬ。美花は、西堀に肩を貸してゆっくりと階段を降りた。

「すみません。なんとかマンションまで行きます。」

「着いたらケガの治療をしないと。」

「いえ。なんとか能登島の行方を見つけないと…まだ、見つける方法が有る内に…。」

「駄目ですよ。骨が折れてるかもしれないし。」

西堀の右足は、引きずるようになっていた。

高宮先生と呼ばれる人物のマンションは、JR岐阜駅の西側にそそり立つタワーマンションだった。西堀は、真つすぐ行かずに周り込むように美花を誘導した。

「どうして？。真つすぐ行けば近いですよ。」

「目立ち過ぎる…奴らに見つけられたらマズイ。」

「奴らつて？。」

「わからない。でも能登島が指示するなら、従った方がいい。奴らが誰であっても。」

2人は、ずいぶん遠回りしてマンションの入口に着いた。

「一週間前に、引越したばかりなんですよ。それで、ノト君と部屋にも行つたんです。」

美花は、ルームナンバーを押して、インターホンから声がするのを待った。

「はい。高宮です。」

西堀は、若い女性の声を聞いた。

「愛？。私。美花だけど、ノト君から聞いている？。」

「聞いている。すぐ解除するから。エレベーターは使わずに、脇の階段を登つて。カメラが有るから、エレベーターは駄目だつて。ノト君が」

「もつひとり、ケガしてるの。7階までキツインだけど…。」  
「いいいわ。私とお父さんでゆくから。1階で待つて。」

正面のぶ厚いガラスの入った入口から、ロックの外れるカチリと言う音がした。美花は、西堀を気遣いながらドアを引いて、エントランスに入った。エレベーターの脇に、非常口と表示のある入口があり、そこから若い女性とその父親らしき中年男性が出てきた。

「この人は、父さんに任せて。美花ちゃんを早く部屋に入れるんだ。」

190cm長身の父親は、西堀を軽々と背負いながら2人を急がせた。一気に7階まで登りきり、美花と西堀は部屋の中に入った。

「美花。見て。大変な事になってる。」

同級生の高宮愛は、つけっぱなしのテレビを指差した。

「現在。能登島秀彦さんの消息はつかめていません。アパートの内部は、すべての家財道具が運び出された状態で、入口に鍵が掛けられていたと言っ事です。隣の部屋の男性が、騒がしいので注意をしようと言った所、能登島さんの助けにくれと言っ声を聞いています。その直後、後頭部を殴られ気を失いました。朝6時に意識が戻り警察に通報したと言っ事です。犯行が行われたのは、午前3時前後と見られています。また、能登島さんが勤めているニューグリップタイヤ本社も、何者かに侵入され、社内に居た社員全員が連れ去られた模様です。詳しい事は判っていません。何か情報が入り次第お伝えします。」

画面は、キャスターの顔から能登島のアパート前の画面に切り替わった。

「何がどうなってるのよ?。」

西堀はソファーに寝かされて、高宮先生に傷の手当てをしてもらっていたが、半身を起こしてテレビを見つめていた。

「クソッ。急がなきゃ。」

「無理よ。西堀さん。」

高宮先生が消毒液とガーゼを持った手で、西堀の体を押さえようとしました。高宮先生のプチサンボンの香りが、西堀を多少冷静にさせた。「駄目だ。能登島がやられちまう。なんとか能登島とルートを確保する。そしたら美花さん。あなたの出番だ。能登島を救えるのは、あなただけだ。ルートを確保したらこの部屋に連絡します。それまで動かないで。あなたは我々の最終兵器だ。あなたしか能登島を救えない。クライムズにエントリーして下さい。」

「父さん。西堀さんに協力してあげて。」

「いいとも。私の車で行こう。愛は美花さんを守ってあげるんだ。」

「わかった。お父さん気をつけて。」

「任せとけ。西堀くん。行くか?。」

「すみません。お願いします。」  
高宮愛の父親は、もう一度西堀を背負って、ドアの外に出た。西堀  
が目指すのはインターネットカフェ。  
巨大なアンフェアとの闘いの幕が切って落とされた。

―次話 第4面につづく

## ―第4面 ログイン

### ―第4面 ログイン

西堀は高宮幹雄に背負われて、地下の駐車場まで降りてきた。

「高宮さん。奥さんがみえないようでしたが?。」

西堀は何の気なしに質問した。

「あー。妻は愛が高校生の時に離婚しました。愛は時々会いに行ってるようです。私とは他人ですが愛にとっては母親ですから。海上自衛隊のイージス艦に乗ってまして、艦長候補になるにあたって揉めましてね。」

「そうですか。すみません。つまらない事を聞きました。」

「いいんです。あの娘には両親で苦労ばかりかけてしまっ。と  
ころで、どこに行きます?。」

「この近くにインターネットカフェジュンジュンって店があるはず  
なんです?。」

「ああ。愛の大学時代の友達がやってる所ですね。中島さんですか。  
名前が変わりましてね。ゴーケアフォーナカジマになりました。:

この車です。ドアを開きます。」

高宮さんはオートロックを解除して、西堀を後部座席に押し込んだ。  
西堀は寝そべる形で車に乗った。

「中島は大学の後輩になるんです。あとは彼を頼ります。高宮さん  
は、愛さんと実花さんのそばに居て下さい。Eメールアドレスがあ  
れば教えて下さい。」

「えー。愛がホームページを持ってまして。確か:。」

高宮さんはダッシュボードの中を探って、名刺を取り出した。

「…。愛の名刺です。これに全部アドレスも書いてあります。」  
西堀は手を伸ばして名刺を受け取った。性同一性障害研究者と肩書きが書かれていた。高宮先生と言う呼び名の理由を西堀は理解した。「車を出しますよ。」  
高宮さんは夜の岐阜駅前に車を出した。

高宮さんは旧インターネットカフェエンジン。現在、ゴーケアフォーナカジマの階段を西堀を背負って上がり、カウンター前のパ  
イプ椅子に座らせてくれた。

「じゃあ、私は行きます。必ず連絡してください。」

「はい。必ず。」

高宮さんが去ると同時に、奥の事務所から中島勝義なかじまかつよしがノソツと出てきた。

「あれっ。西堀先輩。無事だったんですか。会社全滅みたいですよ。」

「間一髪で逃げられた。…すまないがパソコンを使わせてくれ。会社の同僚を救いたいんだ。」

「そりゃいいですけど。なんかひどい怪我してますよ。」

「一応手当てしてもらったから気にするな。でも良かったら肩を貸してくれ。」

中島はカウンターから出てきて、西堀に肩を貸すとカップルシートのブースに座らせた。

「おまえ。店長になつたのか？。中島。」

「店長？。そんなもんじゃないですよ。東海3県下に20店舗を展開するゴーケアフォーナカジマの経営者ですよ。これでも。」

「すごいな。相変わらずネーミングセンスは悪いけど。」

「言われちゃうよな、西堀先輩には。何か食べませんか？。中村屋の奴があるんですよ。」

「悪いな。助かるよ。」

西堀は痛む体を起こして、パソコンを起動した。



能登島のホームページアドレスではなく、暗号の中にあつた能登島専用のゲーム内に設置してある、管理用の部屋にアクセスする。アドレスをまず打ち込む。5つ程キーワードを要求され、西堀のモニターはゲーム内に入った。

画面はCGで作られた能登島のアパートの部屋の内部だった。方向キーでグルリと見渡す。

見覚えのある配置でベットやパソコン、テーブルがあつた。パソコンに近づくと画面には緊急事態という文字が赤く点滅して表示されていた。その下にクリックとある。西堀はクリックした。画面はIDナンバーを要求してきた。西堀は会社の自分のIDを打ち込んだ。西堀栄一を確認しましたー

と表示された。そして声がスピーカーから出た。

「西堀。後ろを向いてくれ。」

合成された能登島の声だった。西堀は方向キーで画面を回した。CGの能登島が立っていた。

「悪いがこれは本物がコントロールしている俺じゃない。単にバーチャル日本政府内の情報にアクセスできるプログラムだ。これを使ってゲームがどうなっているか確かめてくれ。それから本物の俺がどうなっているのかも判るかもしれない。音声入力の子マイクをセツトしてくれ。」

西堀は中島にマイクを頼んだ。セツトしてマイクに言った。

「どうやる?。」

「そこをどいてくれ。パソコンを使わせてほしい。」

西堀は方向キーを操作してソファの方に向いた。CG能登島は見ただことのある格好でパソコンを操作した。

「よし。くるぞ。」

CG能登島が言うと、ドアをノックする音がした。

「ドアに行って、ノブをクリックしてくれ。」

西堀は方向キーでドアに向かいノブをクリックした。紺の背広を着たCGの男が入ってきた。

「バーチャル日本政府総務省広報部の君武です。西堀栄一さん。よろしく願います。」

「いったい何がどうなっているのか教えて欲しい。」

「質問が漠然としていますが？。現在のゲームの状態でしょうか？。」

「じゃあ、まずそれから。」

「現在はエントリーの再開を行っています。ゲーム自体は一般のウイルスと軍事用のウイルスとで攻撃されていますが、人免疫型の抗体プログラムが機能して、防御に成功しています。繋がっているホームページは残念ながら軍事用ウイルスのコントロール下に落ちました。ただし破壊されていません。むしろ一般のウイルスを排除し維持させようとしています。」

「軍事用ってのは、どこの国のウイルスかわかります？。」

「その判別はできませんが、ウイルスの侵入の仕方に特徴が見られます。ダブルウィリアムズと言う名の元ハッカーの特徴が顕著です。彼は現在、アメリカ合衆国の協力者になっています。」

「じゃあ。ゲーム内にアメリカ合衆国の協力者はエントリーしてます？。」

「アメリカゲームサイトランキング トップ10に入っているゲーム、そのまま10人が最初にエントリーしてます。彼らのPCのGPS位置はペンタゴンと判明しています。」

「なんでそんな事が判るんだよ？。」

「この10台のハードウェアはゲーム開始48時間前に、ペンタゴンに搬入されている事を突き止めました。」

「つまり。裏と表から攻めて来てるわけか。…狙いは何だろう？。」

「テッド マクシミリアン氏の遺産と見られます。」

「アメリカが市民の遺産を？。」

「チャットで交わされている会話を解析した所。テッド マクシミ

リアン氏の遺産の中に、アメリカ政府にとって都合の悪い情報が含まれているらしいと分析しています。それが何かは判明していません。」

「そんな分析ができるのか？。やりすぎだろ能登島。」

「ゲーム内死亡プレイヤー調査プログラムを緊急事態発動により流用しています。」

「個人がアメリカに対してか？。そりゃ部屋の中身ごと持ってかれるわけだ。」

「能登島管理者のGPS位置は、ほぼ確認しています。」

「無事なんですか？。」

「神奈川県の米軍座間キャンプ内にある建物の地下に生存を確認しました。アルカイダの暗号ファイルの中に、そのレポートを見つけました。」

「そんなものにアクセスするなよ。会社が襲われても不思議じゃないよ。」

「ニューグリップタイヤ株式会社の社員47名は、現在横須賀基地の護衛艦内に収容されています。あと2分で出航予定です。」

「なっ…。どこに？。」

「太平洋上で待機する任務を受けています。」

西堀は集中力を高めようとして黙った。

「能登島管理者とアクセスを希望されようとしていますか？。」

「…。君武さん。あなた優秀ですね。リアル日本政府に売り込みたいくらいですよ。」

「ありがとうございます。で？。希望されますか？。」

「もちろんお願いします。」

「能登島管理者は、おそらくアメリカ政府に強制されて、バーチャル日本政府が確保しているゲーム管理システムを奪おうとしてきます。今いるこの管理用の部屋は、どうやら隠蔽に成功したのでしょう。通常のエントリーいしかわ たもつでゲームに入ってきてます。現在、バーチャル日本政府内閣総理大臣石川保に面会を求めています。」

「石川保って石川部長じゃないか。」

「はい。モデルはリアル石川部長です。」

「なんかコンプレックスでもあるのかな。よりによって石川部長とは……。」

CG能登島が画面の外でしゃべった。

「エントリーしているプレイヤー能登島と接触するのが最優先事項だ。」

「どうやるんだ?。」

「こっちは君武さんを確保している。バーチャル首相官邸で接触できる。」

「それは可能です。」

「この西堀栄一はどんな状態なんです?。君武さん。プレイヤー。管理者?。」

「管理者は能登島管理者のみです。あなたはプレイヤーでもありません。ゲーム内ではナッシングキャラクターになります。つまりバーチャル日本政府関係者にはモニターに映りますが、そのほかのプレイヤーのモニターには映りません。」

「つまり、アメリカ政府の裏と表のドリームチームに気づかれずに動けるわけだ。」

「ただし。現在あなたのいるPCの場所を襲撃されたら場合、我々は何もしてあげられません。できれば、こまめな移動をお勧めします。」

「なるほどな。」

西堀の背中を冷たいものが走った。

「後輩つてのは持つとくもんだな。20店舗の社長の後輩は特に。」  
CG能登島の言葉に、西堀は冷静さを取り戻す事ができた。

―次話 第5面につづく



## ―第5面 ハイウェイスター

―第5面 ハイウェイ スター

移動はドアを出て即首相官邸かと思いきや、外はCGの名古屋の街だった。黒塗りの公用車が停めてあり、それに乗らなければならなかった。

「なんか面倒くさいな、このゲーム。」

「プレイヤーは行き先にジャンプする事も可能ですが、西堀さんはジャンプ出来ません。プレイヤーとして登録されていませんので。」

「この車で東京まで?。」

「いえ。小牧の航空自衛隊基地から、ヘリで直接官邸に降ります。ヘリに乗ったら1時間程かかりますので、いったんゲームを抜けられて、PCの場所を移動されると良いでしょう。まあ、ヘリの乗り換え操作は本人でなくても構わないので、このまま他の方に代わっていただいても構いません。」

モニターの前の西堀は、ブースの外にカップラーメンを持って来た中島に

「だそつだ。」

と言った。

「ありえない作り込みのゲームじゃないですか。いかれてますよ。移動時間がかかるなんて。絶対俺もプレーしますよ。」

「その前に、他の場所に移動したいんだけど、何か方法はあるか?。歩くのがキツイんだ。」

「まあラーメン食べてください先輩。」

中島はテーブルの上にカップラーメンと水の入ったコップを置いた。

「ちゃんと手配しましたよ。一度会った事があると思うんだけど。鈴鹿サーキットで…。」

「鈴鹿サーキットって…まさかハイウェイスター大友じゃないだろうな…。」

「正解。やつは今岐阜でタクシードライバーやってんですよ。会った時は交通機動隊の警官でしたけどね。」

西堀はコースから外れてばかりで、芝刈りレーサーと呼ばれていた荒い運転をする中島の友達を思い出した。

「何心配してるか分かりますよ。今は芝刈りしてませんから大丈夫ですよ。」

「まあ。いざと言う時には頼りになるだろうけど…。」

西堀はラーメンを平らげた。中島に肩を貸してもらって、下に降りると、ランサーエボリューションがヘルメットをかぶったドライバーと共に待っていた。

「タクシーだよな。あれじゃないよな中島。」

ドライバーが5点シートベルトを外して、こちら側に身をのりだしてきた。

「中島。その人？西堀さん。」

と呼びかけてきた。中島も驚いた顔をしている所を見ると、これはアクシデントらしかった。

「大友。その車どうしたんだよ。」

「これか？。家で乗ってる車だよ。タクシーじゃおまえの要求は満たせないと思って。」

中島はやバイと言う顔をしながら

「…まあこれなら、何が来たってぶっちぎれますよ。先輩。」  
とフォローにかかった。

「選んでる時間はないか…。へりの乗り換えは頼む。中島。」

「やっときますよ。」

西堀は窮屈なナビシートに苦勞して入り込んだ。





## ―第6面 ルポライター山際

### ―第6面 ルポライター山際

西堀がインターネットカフェ、ゴーケアオーナーカジマを出た頃。フリーのルポライター山際<sup>やまぎわ</sup>、厚<sup>あつし</sup>は部屋の中身ごと消えた男のアパートの前で、知り合いの刑事に食い下がっていた。

「どうして警視庁の白根さんが、愛知県警の管轄に出張ってきてるんですか？。教えて下さいよ。何が起こってるんです？。」

「山際。気持ちは解るがここはこらえる。お前みたいな命知らずが一番危ない。」

白根は本気で山際を心配しているように見えた。警察官にとって記者は仕事の邪魔以外の何者でもない。数年前。イージス艦機密漏洩事件で、山際は白根と殺し合い寸前までやりあった間柄だった。その時にお互いをプロとして認め合ってはいたが、白根にとって最高の邪魔者であり、山際にとって事件の核心に最も近い取材対象であった。

「だからって引けると思いますか？。」

食い下がる山際を無視して覆面パトカーに向かおうとしながら、白根は突然クルツと振り返った。

「クライムズにエントリーしろ。その方が近道だし、死ぬ確率も小さい。」

山際は白根にぶつかりそうになりながら、ニヤリと笑った。

「ありがとうございます。白根さん。」

「なんだか分かってるのか？。」

「ガイシャのゲームですね…。命があるないってことは…アメリカ

が動いてるって事でしょ？。違いますか？」

「俺の口からは言えん。」

それが答えだとは言わずに白根は覆面パトに乗り込んだ。

白根の車を見送りながら、この現場の異常さを山際はチャンスと見ていた。事件自体も異常だが、現場には本来首都防衛を任務とする警視庁の刑事や外務省の役人、さらに自衛隊の情報収集分析を任務としていると噂されている幹部が出入りしていた。

山際は同じくフリー記者の下沢しもざわ拓たくを見つけた。彼は愛知県警の警官に食いついていたが、逃げられる所だった。黄色い規制線のテープから山際の方に歩いてきて、彼も気づいた。

「山際さん。どうでした白根さんの方は…。」

「かまかけたけど、反応はイマイチかな…。そっちは？。」

「県警は頭にきてますね。警視庁に外務省にまもなく防衛省。やりたい放題らしいですよ。」

下沢は20代前半で警察関係に詳しい。

「で…。おまわりさんと外交官と兵隊さんは中で何やってんだ？。」

「さあね…。県警は外の警備だけで中では何もさせてもらえないようです。中で何かやってる人物は、全員アメリカ関係つてのが共通項ですかね…。二オウでしょ？。」

「まだだな。その程度じゃ…。臭いの元はもつと先のはずだ。」

「何から出てると考えてるんです？。」

「…まだ言えんな。コイツでガイシャのゲームにエントリーしてみる。」

山際は持っていたノートパソコンを持ち上げて見せた。

「音声入力が必要です。例のゲーム。」

「ああ。マイクが要るな。久びさに家に帰れる。」

山際は下沢に手を振って現場を離れ、路上駐車していた車に戻った。山際はイラクで知り合った共同通信の記者から謎めいた言葉を聞いていた。

テッド マクシミアンが死んだ後に起こる騒動は、ロシアのスパ

イ事件に原因があると…。それはテッド マクシミリアンが死ぬ一年前にニューヨークのカフェで聞いた話だ。彼はそれを追っていると話していたが、その後ニュースを発した直後、こつ然と消息が途絶えた。

彼が発したニュースは、テッド マクシミリアンが会長をしていた電子投票装置の会社役員会で辞任を要求されて辞職した事に関して、大統領選で使われたフェアプレイと言う電子投票装置に不正があったのでは…と言う内容だった。

「テッド マクシミリアン。大統領選。電子投票装置。不正…までいい。それとロシアのスパイを繋ぐキーワードは何だ？」

「ハンドルにもたれながら、山際は朝から何度も自分に問いかけている疑問を口に出してみた。答えは浮かばない。」

「マクシミリアン エレクトロニクスに、ひと当てあててみるか…。それとも白根刑事部長の言うクライムズにエントリーしてみるか…。」

山際はとりあえず。家に音声入力のマイクを取りに行く事に決めた。それは戦場で生死を切り抜けてきた判断方法だった。1人でのり、不特定多数の中にいた方が狙われにくいし、事態の流れがつかみやすい。ただし、絶好のスクープはその流れに1人取り残された所に存在する。何人もがそこで命を断たれた。今までは躊躇してきたが…。今度ばかりは、その場所に立たなければならぬかもしれない。山際は覚悟した。

― 第7面につづく

## ―第7面 タクシードライバー

### ―第7面 タクシードライバー

大友康洋は、おとなしくランサーエボリューションを走らせていた。しかし、ヘルメットとレーシングスーツは異様だった。

「暑くないか…？。ヘルメット。」

「西堀さん。これ水が循環してるんです…スーツだけじゃなくて。ヘルメットに冷却入ってるのは僕ぐらいですけど。」

「なんで、レーサー辞めたんだ？。」

「長い話になりますね。…でも一言で言うとレースがフェアじゃないと感じてしまったんです。」

「八百長があつたのか？。」

「違いますね。八百長なら逆に跳ね返してやるって燃えますよ。レギュレーションってあるじゃないですか。カーレースって…。」

大友は陽気なタクシードライバーといった空気を醸し出していた。

「…それで。変更になるんですね。レギュレーションが。コース脇の芝刈つてた時はなかつたんですけど、まともに走り始めるとね。」

どう考えても自分を狙い撃ちなんですよ。最初は気のせいかと思つたんですけど、一度優勝しましてね。そしたら国際レースに5戦以上エントリーしないと参加資格がないって言うんですよ。国内は国際レースが2戦しかなくて、あとは海外でね。プライベーターが行けるわけじゃないじゃないですか海外に。それでレース辞めたら、そのレギュレーション翌年なくなつたんです。」

淡々と大友は語っていたが、当時は悔しかったにちがいないと西堀は思った。

「交通機動隊にいたとか聞いたけど。」

「そうです。レースやってる時は警官でした。かなり文句言われましたけど、公安の上の方に親戚がいます、黙認みたいな感じで。」

「それがタクシードライバー？」

「えー…。やちやいましてね。国道を200kmで走ってた馬鹿を抜いて…頭押さえて…停車させたんです。常習者で国道沿いの住民が怒ってまして、自分達でも追いかけてたもんだから…停車させた時も住民が取り囲んだんです。キップ切らせるためにパトカーに移そうとしたら…誰だったと思います？。」

「地元の有力者のバカ息子？。」

「ならましですよ。署長のひとり息子で知り合いですよ。住民も誰だかわかって…内々に済ませるも何も。住民には感謝されて、署長も黙ってましたが。翌月交機から交番に配置が変わりました。交安の親戚に言われました。お前は悪くないが運が悪かったって…気持ちちは分かりますがフェアじゃないじゃないですか。だから警察も辞めました。」

「タクシードライバーの世界はフェアなのかい？。」

「フェアじゃ有りませんよ。でも…この世界はアンフェアを正していける世界です。少なくともアンフェアな連中と戦う事ができます。でも戦ってる馬鹿は僕ぐらいかもしれませんが…。」

「なんで助けてくれるのかな？。」

「能登島さんって人はフェアなゲームを作る人なんですよ。中島は能登島さんのテスト版をプレイして面白いんで、私にもやらせてくれたんです。フェアなゲームでした。だから見殺しにはしません。必ず救いしましょう。」

西堀はジワツと涙が出てくるのを感じた。ゲームはただの慰みものじゃない。人を救う事だと言った能登島の顔が思い浮かんだ。でも俺に何が出来る。国家を相手にいち個人が…とも思った。しかし、アメリカの目的がテッド マクシミリアンの遺産だとして…ゲーム外で何も出来ないから、ゲーム内に人を送り込んできてる

としたら。勝負はゲーム内で決するはずだ。

ならば。ルールはこちらが握っている。能登島の防御壁が破られない限り、こちらに勝ち目はある。五分五分なら充分だ。外はこのタクシードライバーが守ってくれる。

やれるじゃないか西堀栄一。

「やってやるうぜ。大友君。」

タクシードライバーはニヤツと笑って言った。

「それは私のラッキーワードなんですよ。やってやるうぜ西堀さん。フォーツ。」

叫び声と同時に床までアクセルを踏み込まれたランサーエボリューションは愛知県に入り、ゴーケアフォーナカジマ店に近づきつつあった。西堀は骨のきしむ音を聞きながら痛みで失神した。この芝刈り野郎と思いながら…。

―第8面につづく

## ―第8面プレイヤー―山際正義

### ―第8面 プレイヤー―山際 正義

山際 厚が名古屋から豊橋の自宅に車で帰りついたのは午前2時を廻っていた。

ほとんど家に帰らない山際だが、妻と高校生の息子と中学生の娘がいる。

山際は自宅の庭に作業用の小屋を建てている。この部屋は取材の資料庫になっていて、行き詰まった時や記事をまとめる際に作業する取材の90%は記事にならない。残り10%の内5%は編集者が自己保身や新聞社ないし出版社のリスクを考えると掲載されない。残り5%は家族と自分の為に必ず掲載される記事だ。

山際は息子の正義まよしに、この作業小屋のスペアキーを渡していた。ジャーナリストになりたいと言われたその日に、山際はこう言った。

「この部屋の資料は全部見ていい。ただし、その内容をしゃべりたければ記事にして父さんに見せる。父さんが記事を受け取ったらしゃべっていい。」

帰る度に原稿が山際を待っていた。まだ一つも受け取れずに、ダメだと言って正義に戻っていた。

車を降りると作業小屋の明かりがついていた。山際は携帯で息子の番号をコールした。

「…父さんだ。入り口を開けてくれ。」

必ずドアはロックして山際と正義以外を入れないと言うのが、この作業小屋のルールだった。山際は作業小屋に入った。正義は机の上に資料を広げていた。

「仕事するの？。すぐ片付けるよ。」

「いや。パソコンのマイクを取りに来ただけだ。続けていい。」

山際はパソコン関係のソフトや機材が載っているスチール棚に音声入力のマイクとケーブルを見つけた。

「何やるの？。」

「アパートから中身ごとさらわれた男のニュースは知ってるか？。」

「知ってるよ。テレビを見た。」

「その男が作ったオンラインゲームにエントリーする。」

「ゲームで何が判るの？。」

「世界中からリアルタイムでエントリーが続いているらしい。もしかしたら事件の関係者もエントリーしているかもしれない。このマイクでプレイヤーどうしも会話できるらしい。取材にはうってつけだ。歩かなくて済む。」

「父さん。僕も2時間くらい前にエントリーしてみたよ。」

「ほう…。少しはジャーナリストらしくなってきたじゃないか。で？。何かつかめたか？。」

「能登島さんに会ったよ。話しました。」

「続けて…。」

無意識に山際はメモ帳を取り出していた。

「僕が山際厚の息子だと言ってたら、話しをしたいって言ってた。」

ゲーム内のJR浅草橋駅西口の改札で3日後の8月24日午後2時に会えれば会いたい。ただし父さんに携帯や加入電話で連絡はするなって。それ以外で連絡がつかなければ、別の機会をつくるって。

「能登島の様子から何か感じた事はあるか？。」

山際はメモをとりながら、正義に自分の血が流れている事を確信した。

「…。何かを恐れている感じがした。どうしていいのかわからないみたい。でも…。何か成し遂げようって感じはした。」

「完全に誰かのロボットになってないって事か？。」



「そう。協力してくれる人を欲しがってたみたい。」

「その能登島はCGだろ？。表情もあるのか？。」

「音声入力中に、自分のCGにいろんな仕草や表情を付ける事ができるんだよ。マウスを使って。顔は携帯のカメラをつないで、そのまま自分の顔を入れられるんだ。」

「…なるほど。でっ、能登島は父さんを知ってるんだな？。」

「イラクの記事を読んだって。あれは父さんの写真もあったから判るって。」

「よし。今のを記事にまとめてみる。うまく書けたら父さんが使わせてもらう。」

正義は山際を見て目を輝かせた。

「すごいや。書くよ。」

正義は原稿用紙を机の上に広げて書き始めた。山際はウデのいい助手を見つけたと思いつながら、能登島との取材に備えなければならぬ事を考えた。彼ほどの程度の自由を持っているか？。そしてアクセスをする場所はどこにするか？。

新幹線だな。

グリーン車にはコンセントがある。命がけだが、体は快適な取材になりそうだった。

― 第9面につづく

## ―第9面 ゴーケアフォーナカジマー宮店

―第9面 ゴーケアフォーナカジマー宮店

「とりあえず、チェックポイントだ。」

大友はゴーケアフォーナカジマー宮店の前で車を停めた。

「1時間後に来てくれ。俺が出てこなければ、何かアクシデントが起こつたと思ってくれ。そのまま大友君は逃げてくれ。」

そい言う西堀に、大友は不満そうだった。

「見捨てると言ってる訳じゃない。中島の所に戻って、俺がどうなったか探ってくれ。出来れば救出して欲しい。」

「そういう事なら。」

西堀は5点シートベルトを外して、ランサーエボリューションを降りた。

「歩けます?。」

大友は降りてきそうだった。

「急いで車を移動させないと危ない。行くんだ。」

大友は西堀を見たまま、シートに戻った。

「行けつ。」

西堀の声と同時に、車は発進して消えた。

右膝が痛む。この店は地下になっていた。歩道を右足を引きずりながら渡り、地下への階段を壁につきながら降りなければならなかった。ドアを開けると、一宮店の店長が駆け寄ってきた。

「西堀さん。社長から聞いてます。」

「すぐにアクセスしたい。」

「もう立ち上げてあります。まだへりは飛んでる最中です。」

「中島にアクセスの仕方を聞いたのか?。」

「違います。私も社長もゲームにエントリーしてまして。ゲームの中で事情を聞きました。で、君武さんが、うちのPCに西堀さんのデータで立ち上げてもらいました。」

「オンラインゲームって、そんな事できたっけかな…。」

「聞いた事ありませんけど、やれてるのならできるんですよ。」

「だろうな。どのブースで立ち上がったる?。」

「10番です。」

西堀は10番ブースに痛む体を沈めた。マイクを手取る。

「君武さん。PCの場所を移動しました。1時間でまた場所を移動します。」

「ご苦労様です。あと2分で着陸します。移動中は何事もなかったですか?。」

「気味悪い程：何も。」

「実は。CIA関係の暗号通信の中に、西堀さんの名前が出始めます。日本国内でCIAが動けるとは思いませんが…リアル能登島さんや会社を襲った連中を動かしてるとしたら…そろそろ何かあるかもしれません。」

「能登島に言つとくよ。CIAの暗号なんか解いちゃ駄目だって。君武はジョークと受け取って笑ってみせた。」

「…降りますよ。マウスで、そのバーをクリックして下さい。ゲームの中でも怪我すると動きが悪くなりますよ。」

西堀はヤレヤレと思いながらバーをクリックした。

下に首相官邸のヘリポートが見え始めていた。

君武はかがむようにと西堀に指示しながらヘリポートから官邸の中に移動した。

西堀はプレイヤーではないので、ライフゲージは無限大のマークがついていた。

ークソツ。ゲームの中じゃ不死身だが、外じゃ気絶しそうだー

と西堀は思った。

中に入ると廊下を挟んだ向かい側のドアから別の部屋にと、中心部に案内された。

「西堀さん。内閣総理大臣 石川 保首相です。」

石川開発部長の満面の笑顔を見て、西堀はめまいで倒れそうだった。差し出された手にクリックして握手を交わした。

「ようこそ。我々は西堀さんの力を必要としています。まもなく能登島管理者も到着するはずです。」

首相はモデルと違ってポジティブだった。西堀はソファーに移動して座った。君武がドアのそばにいて能登島を迎える態勢をとっていた。管理者の能登島はゲームの中では最高位にあるからだ。ただクライムズの中では権限に自ら制限を設けていた。正当な理由があるとバーチャル日本政府が認めなければ管理者と言えど拒否できるようになった。

能登島はどれだけの自由度を持っていて、どれだけの情報をもたらしてくれるのか？。おそらく監視されているだろう状態で、何を伝えてくれるのか。

明らかに生死がかかっていた。

「来たようです。」

君武が静かに言った。

ドアが開いてCGのプレイヤー能登島が入ってきた。

首相は立ち上がって歩み寄り両手で握手して迎えた。

「能登島管理者。お会いできて光栄です。」

プレイヤー能登島は無表情で答えた。

「私は今アメリカ政府の管理下にあります。申し訳ないが首相、私は味方でないと認識していただきたい。」

石川首相は驚いた様子もなかった。ただそれを見ている西堀にとっては笑えないコントを見せられているようだった。

「…もちろんです。概要は把握しています。で…。アメリカ政府の要求をお聞かせください。」

「ゲームの管理システムをお渡しください。」

「逆にお聞きしたい。どうやってたらゲームの管理システムをお渡しできるんです？。我々是对ハッキングプログラムそのものです。自らプログラムのコントロールを放棄する機能はありません。どうしてもと言われるなら、我々を破壊して持っていかれるしかありません。」

「アメリカ政府はトップクラスのハッカーを使って失敗しました。その方法は不可能です。」

「では？。他に方法が？。」

「バーチャル日本政府が国としての主権を放棄できる権限が、首相に与えられている。」

「それを使用してゲームの管理システムを渡せと？。おっしゃる訳ですか？。」

「アメリカ政府はそう言っている。」

「では。私の返答です。私に主権を放棄させたければ、バーチャルアメリカ政府を使って宣戦布告しバーチャル日本政府を占領する事です。幸いゲームの中なので現実の死者は出ません。まあ、とぼつちりをくったプレイヤーがゲーム内死亡になつてゲームができなくなるくらいですな。」

「わかりました。そうアメリカ政府に伝えましょう。」

「能登島管理者。あなたは大丈夫なんですか？。」

「身体的な危害は加えられていません。ただ外出はできません。ここがどこかも不明だし…所で西堀栄一がどうしてるか知りたいが。」

「さあ。ゲーム内に存在を確認できていません。」

プレイヤー能登島はチラツと西堀を見たような感じがした。ナツシングキャラクターの西堀はバーチャル日本政府関係者以外にはモニターに映らないし認識できない。能登島は関係者なのだ。おそらく能登島のモニターには西堀が何らかの形で映っていると思われた。

プレイヤー能登島は明らかに西堀に向かって言った。

「そちらの方は？」

首相はよどみなく答えた。

「私の補佐官です。富野由貴君とみのゆきです。黒の背広が良く似合っているでしょう？。」首相は、能登島のモニターに映っている西堀の姿を伝えようとしているようだった。

「そうですね。眼鏡もセンスがいい。…専門は？」

「北米担当です。内閣のバーチャルアメリカ政府とのやり取りは彼の助言で行っています。」

「そうですね。以降は彼と交渉する訳ですか。」

「能登島管理者がそう希望されるならば。」

君武がタイミングよく入ってきた。

「では富野北米担当。北米局室に移って協議を続けましょう。」

これはアドリブの芝居であり西堀にも演技を暗に要求されていた。乗るしかない。プレイヤー能登島は立ち上がり、首相に一礼すると君武の後ろに続いた。西堀もそのあとを追った。長い廊下を歩きエレベーターに乗り、地下3階に降りた。

君武に続いて北米局室に3人は入った。

入るとプレイヤー能登島は急に仕草や表情を出し始めた。

「説明しましょう。」

君武が言った。

「…今現在、能登島管理者の音声入力ができない状態にしました。会話はキーボードを使って行われます。能登島管理者の画面上は、こちらが用意した物が流れています。能登島管理者の後ろで監視している人間には我々の会話を聞くことも見る事もできない状態です。こちらの会話や自分の文章は暗号読み取り機能の付いた眼鏡で能登島管理者は読み取っています。能登島管理者が文字キーを打つのに合わせて、別の文章が表示されるのを監視者は見えています。どうぞ自由に話していただいても安全です。」

「…と言う事だ。すまん西堀。実花は高宮先生の所に？」

「あゝ。間違いなく送り届けた。」

「あのマンションは実は防衛省の施設が地下にあつて、アメリカ政府と言えども簡単には手がだせないんだ。」

「実花さんをどう使つてレスキューするんだ?。」

「正攻法さ。実花は世界最強のゲーマーだ。俺のゲームしかやらな  
いから知られてないだけでね。実花に初登頂させて、それと引き換  
えに俺の身柄を自由にしてもらう。簡単だろ?。」

「なんでアメリカ政府は遺産にこだわつてるんだろ?。」

「テッド マクシミリアンが大統領選の不正の証拠をどこかに持つ  
ていて、遺産相続の際に他のリストと同時にマスコミに出そうとし  
ているつてのが、俺の聞いた説明だ。」

「冗談よせよ。他のオンラインゲームにしろよ。」

「簡単にブレイクできないゲームじゃないとテッドの作戦は成功し  
ないだろ?。ちなみにテッドは大邸宅のどこかにPCを隠していて、  
そこから自動でCPUがプレイヤーとして入り込んで。アメリカ  
政府が初登頂しそうになったら、このCPUプレイヤーで阻止する  
つもりなんだろう。実花には北米担当のお前に付いてもらつてサポ  
ートしてもらいたい。ただしプレイヤーが実花である事は偽装しな  
ければならない。アメリカ政府が防衛省に圧力を加える事は可能だ  
からな。」

「それは伝えよう。でも、なんで選挙で不正を?。」

「その説明はない。俺にも予想がつかない。ただ探れる人物と接触  
できそうだ。」

「君武さんの方でも判らないんですか?。」

「不明です。そもそも現大統領が候補の時に行った事ですから政府  
に記録がありません。マクシミリアンエレクトロニクスもそうした  
記録を作らなかつたと思います。単純なプログラムの変更だった可  
能性がありますから。記録を残したのはテッド マクシミリアンだ  
けだったんでしょう。その記録にはゲームの初登頂者が確定しない  
と手の出しようがないですね。」

プレイヤー能登島は西堀に向いた。

「西堀。ナツシングキャラクターでゲーム内のアメリカ側プレイヤーの情報を集めてくれ。それを使って実花をサポートしてやって欲しい。」

「わかった。そろそろゲームを抜けなきゃいけない時間だ。」

「このまま抜けて下さい。北米担当はバーチャル日本政府側に移動させました。」

「じゃあ、能登島…死ぬなよ。」

「お前もな。」

西堀はゲームを抜けてネットカフェのPCを切った。

「店長。悪いが行くよ。」

「ええ。ゲームの中から見守ってます。気をつけて。むかしF1のレーサーで中嶋っていたでしょ。ピットクルーがこう言ってるんですよ。ケアフオー（気をつけて）ゴー、ゴー、ゴー。（行け、行け、行け）って。それが店の名前の由来なんです。いい名前ですよ。センスは最悪だけど。」

「…店の名前は由来が全てさ。センスなんてクソつくらえさ。」

「ですよ。社長は最高です。」

西堀は店長にハイタッチして、階段に重い体を向けた。

「第10面につづく」

「作者からお詫び」

本作において単語の間違ひがありました。前書きと第1面で、シミユレーションとしなければいけない所をシュミレーションとなっていました。導入部分の重要な場所で、がっかりされた読者の方も多かったと思います。さっそく訂正させて頂くと共に深くお詫びいたします。指摘をして頂いた読者さんには、ありがとうございますの



一言です。こういう読者さんこそ作者にとって、かけがえのない宝だと思っています。作者としては無いように努力しますが、また有るようでしたらメッセージ欄が炎上しても構いませんので（ウメさんは困るかも？）指摘して頂けますようお願いします。この部分は一週間程度掲載させて頂き、いったん削除して連載終了後に後書きの後ろに再度掲載させて頂きます。

武上 溪

## ―第10面 JR浅草橋駅西口改札

### ―第10面 JR浅草橋駅西口改札

山際は正義を連れて、新幹線のぞみのグリーン車の中にいた。名古屋から東京まで約2時間ある。車両最後尾の席で、ノートパソコンを2つ並べてゲームにログインした。ゲーム内の時間は止まらない。8月24日の午後2時まで、あと1時間。

ゲーム内の拠点となる自宅は自由に選ぶ事ができる。首相官邸前に2人は自宅を設置した。ほとんどのプレイヤーは新島への船が出る埠頭の近くに設置していた為、このあたりは自由に選ぶ事ができた。地下鉄丸の内線で東京駅まで出て、山手線で秋葉原に行き、総武線に乗り換え、ひと駅で浅草橋駅に入った。

山際は現実のこの駅を知っている。

最後尾車両から降りるとすぐに西口の階段がある。石づくりの使い込まれて丸く磨かれている階段を降りるとすぐに改札になる。左にはトイレがある。そのトイレは白いスイングドアになっている。細かい所まで再現してあると山際は思った。改札の正面は券売機で、両側に出られるようになっていて、いわゆるガード下のスペースが西口になっている。

山際と正義は改札を出た。時間まで30分程度ある。山際はマイクのスイッチを切った。

「正義。マイクを切れ。」

のぞみの隣りの席に居る正義はそれに従った。

「能登島は監視がついてるはずだ。どうやって話すつもりだ?。」

「能登島さんは管理者なんでバーチャル日本政府と連携してるんだ。」

マイクの音声入力をバーチャル日本政府が止めて、別の映像をモニターに流すと言った。能登島さんはキーボードで会話すると…。」「こつちもか?。」

「いや…。こつちのモニターは通常とかわらないって。」

「すごいな。自分の打った文字を見ずに会話するのか…。こつちがしゃべった事は、どうやって認識する?。」

「能登島さんの眼鏡に仕掛けがあつて、モニター上に暗号化されて表示されている文字を見る事ができるらしいよ。」

「命がけだな。…来たな。」

山際はマイクのスイッチを入れた。山際のモニターの中に、アロハシャツを着たジーンズの男が入ってきた。

「ありがとう正義君。連れてきてくれたんだね。」

ジーンズの男は正義に呼びかけて、山際の方を向いた。

「能登島秀彦です。山際厚さんですね。」

山際は差し出されていた手にクリックして握手した。

「どうも。手短にいきましょう。見張ってる方もみえるようなので。」

「

「そうしてもらえると有りがたい。」

「まず。何から?。」

「実は、テッドマクシミリアンの遺産の中に、大統領選の不正の証拠があると言つのはご存知ですか?。」

「ええ。」

「山際さんにお頼みしたいのは、不正が行われた理由です。」

「それは私が一番知りたい事です。」

「実はバーチャル日本政府と3日前に接触したんですが…その時の情報の中にジョン ミッチェルと言うプレイヤーがエントリーしている事が分かりました。」

「ジョンが?。よく知ってますよ。父親とは知り合いません。」

「そう。ジョン ミッチェルの父親は、エドガー ミッチェル。共同通信の記者で、この不正について取材中に消息を断っている…で

すよね。」

「つまり、プレイヤージョンと接触して欲しいと?。」

「はい。旅費は山際さんのデータに入れておきます。バーチャルアメリカに居るジョンと話してみてください。」

「どうやってゲーム内をアメリカまで?。」

「パラメーターに金額があるので、成田空港に行くだけで飛行機に乗れます。パスポートも所持リストに、すでに入っています。正義君の分も。それから身体能力のパラメーターは2人とも最高にしておきました。ゲーム内で襲われたら反撃して下さい。無敵ですから山際さんは英語はできますよね?。」

「問題ない。」

「正義君の方には、直訳で翻訳が出るから意味はつかめるでしょう。」

「のぞみの山際はメモを取り出した。」

「ちなみに、これは仕事なんですけど…拉致された経緯を話して頂けますか?。」

「ええ。構いません。実は文章にしてあるので…それをバーチャル日本政府に頼んで、そちらのEメールの方に入れておきます。長くなるので…。」

「それで構いません。」

「では。そろそろ別れましょう。山際さん、正義君。ありがとうございしました。調査の件はよろしく。」

「こちらこそ。」

能登島は改札の中に消えて行った。

山際はいったんゲームを抜けた。正義もそれにならった。

「さて…。スクープだな。Eメールをしてみるか…。」

正義も山際のノートパソコンを覗き込んできた。



## ―第11面 襲撃

### ―第11面 襲撃

警視庁電算機犯罪課2部が白根 登刑事部長の所属となっている。しかし略称電犯課とは命令系統が違っている。2部は警視総監直属の部で間にいかなる上司も存在しない。つまり、警視総監以外の命令を聞く義務がない。その限界を知らない捜査から、旧称の特別編成別班と併せて、特編別班とくへんべつばんなんでもあり課と内部では呼ばれている。実際の仕事は、日本国内で活動する海外のスパイ組織の監視と非法活動の阻止を行っている。

能登島失踪はそうした組織の訓練された実働グループの犯行のように見える。しかし、これらの組織はこれほど目立つ行動は起こさない。それは長い年月をかけて作り上げてきた組織を危険にさらすからだ。

部下の10人を割いてクライムズにエントリーさせながら、犯行グループを別働隊で捜査させていたが、あまり成果は上がっていない。ただし犯行現場の外務省と防衛省の顔ぶれから見ても、アメリカがらみとは知れていた。たとえアメリカがらみと言えども、日本の警察の管轄下で誘拐事件を起こされて黙っているわけにはいかない。

「木曾。山際は見つかったか？」

ゲームにエントリーしている部下のひとりに白根は聞いた。

「ゲーム内の自宅は確認しました。居ないようです。」

「よし。張り込め。」

10人いる右端の部下から声が上がった。

「再びプレイヤー能登島を捕捉しました。どうしますか?。」

「尾行しろ…。気づかれるな。」

プレイヤー能登島はゲームエントリー時から監視していたのだが、時々こつ然と消えてしまう。見失ったJR浅草橋駅のホームに再び現れた能登島を部下は尾行し始めた。白根が消えた駅に必ず現れると踏んだのが当たった。プレイヤー能登島に直接職質するのが一番簡単だが、背後に居るグループに白根達の存在を知られたくなかった。

白根は時計を見た。別働隊の定時連絡が15時に入る…15時ちょうどに、暗号化された電波を飛ばす無線に声が入った。

「こちら、電犯2部1班。聞こえますか。」

白根は無線のマイクを握った。

「白根だ。何かあったか?。」

「目新しい事は有りません。CIAの筋が確かになりました。例のアメリカ国内で養成されていたJリーグ部隊の犯行が濃厚です。」

「日本人だけで構成されている特務工作員のやつか…。」

「キャンプ座間にいったん入ったんですが出てきました。現在追跡中です。ターゲットはニシボリと判明しました。」

白根はピンときた。ニューグリップタイヤ本社で確保した社員名簿を机の上から引き寄せた。

「能登島の同僚にその名前がある。ニシボリは拘束されてないと見た。ニシボリのデータを送信する。ニシボリの身柄を確保しろ。」

「了解。ニシボリ本人を確認後応援を要請します。」

「2班3班を合流させる。ニシボリをCIAに獲られるな。」

「了解。ここは日本じゃないですか。もう好きにはさせません。」

「その意気だ。頼むぞ。」

マイクを握る白根の額に汗が浮かんでいた。これは白根が独断でやっている事だ。警視庁自体に圧力がかければ、白根は終わるかもしれない。正体は必ずばれるだろうが、その時には全てが終わっていないかなければならない。そして生かしておいて今後危険がないと思わせ

なければならぬ。相手は安全保障に関われば何をしてもいいし、何でもしなければならぬモンスターだ。

電犯課2部第1班の横山よこやま 優は覆面パトで、前をゆくトヨタのワゴン車を見失うまいとして、東名高速を名古屋方面に向かって走っていた。

助手席にはベテランの司老しろう 正隆まさたかが前を睨んでいた。無線で警察へりを呼び出しす。

「こちら電犯イチゼロ。電犯カウントゼロどうぞ。」

「こちら電犯カウントゼロ。ホシのクラウンを追跡中…後方は電犯ニゼロがマーク…東京方面に向かっている…現在位置は豊川インター付近…前方に要確保者のランサーエボリューション…くりかえす…前方に要確保者のランサーエボリューション…」

「電犯カウントゼロ、了解した。こちらも要確保者に向かう。」

横山はすでに、高速を降りて上りに乗り換えるために、焼津インターの出口に入っていた。

「キャップがゴネてへりを獲ったのは正解でしたね。」

そう言う横山に、司老は返答をしなかった。事件の後にこれらの行動が、電犯課2部の解散につながりかねないと思っていた。特編別班なんでもあり課と蔑視する幹部はなんとかして解散に追い込もうと画策しているのだ。

「…ちゃんと運転しろ…このヤマを無駄死にさせるんじゃないぞ。」

横山は黙った。車は覆面パトだがパトライトを上げてる状況ではなかった。料金所を抜けると、一般道に出る信号でブレーキを踏んだ。へりの続報が続く…

―三ヶ日インター通過

―浜松西インター通過

―磐田インター通過

―…ブツブツ。こちら電犯カウントゼロ…全電犯2部移動に連絡



…ランサーエボリユーシヨンは袋井インターで高速を降りた…ホシのクラウンも後続している…くりかえす…」

「…横山。脇に寄せろ。続報まで待機だ。」

青信号で右折して出てから、すかいらーくの駐車場に車を寄せた。

「…。ランサーエボリユーシヨンは1号線を掛川方面に移動中…ホシのクラウンが車間を詰めている…ホシが要確保者を襲撃に出た…くりかえす…ホシが要確保者を襲撃に出た…100キロ近い速度で一般道を移動している…」

「こちら電犯イチゼロ。焼津インター付近で待機中。要確保者を確保するか？。本部の指示を要請する。」

司老はかすれた声で無線に言った。

「こちら本部：電犯イチゼロ…ホシのクラウンを撃墜<sup>おとせ</sup>…さもないと複数の死亡者が出る…一号線の信号を全て青信号に変えた…一号線の脇で待ち伏せる 野田ICだ…」

横山はナビの画面で野田ICを確認すると車を急発進させた。司老は、おとせと言う意味を発砲や車での体当たりも含めて、CIAの特務工作部隊の車を停車させると受け取った。

「どつやっつて、おとします？。」

横山の声が震えているのに司老は気づいた。

「ホシの車の横に着ける。ドライバーの頭にクリティカルヒットさせる。」

「…そんな事して良いんですか？。」

「いいわけないが、奴らだって、して良いことをしてるわけじゃない。まあクビになるかもな…。」

「電犯イチゼロ…できるか？…」

司老は無線のマイクを取った。

「部長。懲戒免職にならないようお願いしますよ。」

「それは保証する」

司老は無線のマイクをホルダーに戻すと、ホルスターから銃を抜いた。

「訓練じゃ、人形に300発命中させてるが。どうかな…。」

「司老さん…。これはフェアだと思いますか?。」

「電犯課2部自体がフェアじゃねえんだよ。俺達がアンフェアな仕事をしなかったら、世の中が保たねえんだよ。人を殺してその見返りが死刑にならない事だとしたら、運が良いと思わなきゃいけないだろうが。」

横山は一号線を島田まで行って、野田ICで藤枝バイパスに入ってくる2台を待ち伏せた。

大きくなるエンジン音と、バックミラーに小さな車影を認めた。

「来ますね…。」

横山はギアを入れてアクセルを床まで踏み込んだ。

「磁気嵐を使いましょ。駄目なら撃てばいい。」

「馬鹿野郎っ…。俺達はプロだ。不確かな物を実戦で使えるかつ。」

司老は右足で床を激しく蹴った。

大友は一宮インターから東名に登った時点で、白のクラウンに気づいていた。

西堀は苦しそうに見えた。

「来るもんが来ましたよ。西堀さん。」

「時間切れか…。ゲームにエントリーしてるドリームチームの情報を集めたかったが…。岐阜に戻って実花さんに任せるしかなさそうだ。」

大友はバックミラーを指で叩いて言った。

「多少はいじってるでしょうが。元はクラウンですからね。車だけの勝負なら楽勝ですよ。」

「車だけで勝負してくれそうなフェアな連中とは思えんが。」

大友は「いいぞー」思った。まだ西堀には精神的余裕は有りそうだった。

「上に警察ヘリと、奴らの後ろに覆面がいます。」

「…どっちだ?。」

「味方だと思えますが。賭けます?…。」

「根拠は?。」

「警察官つてのは、なめてくる連中には屈しないんですよ。たとえば懲戒免職になったつて。…それだけです。」

「俺は賭けはやらない。すまんな。」

「賢明です。シートベルトはちゃんと締まっています?…ヘルメットをかぶって下さい。次のインターで降りて勝負します。」

西堀は白いフルフェイスの中に頭を押し込んだ。

普通に料金を払って袋井インターで降りると、大友は信号を無視してアクセルを踏み込んだ。レーシングゲームでは見た事のある光景だが…加速Gは西堀の体をきしませた。

不意を突かれて、後方のクラウンがバックミラーから消えた。

しかし、それもつかの間。再びバックミラーに姿を現してきた。

「けっこう良いチューンしてますね…。じゃあこれはどうだ?。」

大友はアクセルを床まで踏み込んだ。

一般道である。まるで他の車がよけてゆくように見える。しかし、予測してよけているのは大友だった。

クラウンはついて来る。

「来ますね…。あれは?。」

大友は路側帯から急発進する車に注目した。

「…あれも味方ですよ。覆面パトだ。」

「どうするつもりかな?。」

大友は西堀の声を聞き流してバックミラーを見た。

クラウンのフロントグリルから何やら出てくるのを大友は動体視力を使って見た。撃つ瞬間に弾道を予測してよける。狙いは真っ直ぐだが、撃つ前に避けると当てられてしまう。引き金かスイッチを押す瞬間に、右にハンドルを切り、なおかつ車体を立て直さなければな

らない。

初弾を外せばスナイパーは動揺する。2発目は甘くなる。相手が撃つたろう瞬間に意識を集中させた。レースでも、後ろのドライバーが仕掛けてくる瞬間を100%当てる事ができた。

短いトンネルを2つ過ぎ、左にカーブしている長いトンネルを出て谷稲葉ICと表示が見えた。さらに原トンネルと書かれたトンネルを抜けると一ひといきPA-と言うパーキングエリアを右に見た。大友は意識を集中した。

まだ。まだだ…。

…来る。

大友はハンドルを右に切った。…が弾は出なかった。しかもクラウンからドライバーの気配が消えた。そしてバックミラーから消えていった。

代わりに路側帯にいた覆面パトカーが後方に現れた。大友はスピードを落とし停車した。覆面パトカーは前方に着けず、後方に停車した。

「西堀さん。味方で正解でした。」

背広を着た若い男と50代くらいの男が降りてきた。

50代の男が大友の側から車内を覗き込んだ。

「西堀さんはどちらです?。」

「僕ですが?。」

「遅れて申し訳ありません。身辺警護をさせて頂きます。西堀さんは我々がお守りいたします。」

大友は硝煙の臭いを感じた。この男が撃つたらしいと直感した。

「あのドライバー…撃つたんですか?。」

年配の刑事は笑顔から鋭い顔に戻った。

「そのつもりだったが…ちゃんと防弾ガラスと防弾板が入ってた。

…コイツは俺の趣味で作ってる磁気嵐発生装置だ。」

DVDケース4枚を重ねた大きさの樹脂製の箱が手に握られていた。  
「車の電装系をダウンさせ、乗ってる人間も1時間程行動不能にする。今まで成功したのは10回に1回だ。君は強運の持ち主らしい。」

「…そうですね。あのドライバー良いセンスとテクニクを持ってたんで。是非サーキットで勝負したいと伝えて下さい。」

「言つとこう。奴も今回の失敗で失業だろうしな。」

大友はそれに笑って答えた。西堀が司老に向かって頼んだ。

「できれば岐阜駅前のタワーマンションにたどり着きたいんですが？。」

「へりで行きましょう。あそこは屋上にへりポートがあります。」

「知ってるんですか？」

「ええ。このドライバーが元優秀な警察官だった事も。」

西堀は体から力が抜けて行くのを感じた。

― 第12面につづく

## ―第12面マッキンリー山

―第12面 マッキンリー山

山際はバーチャル日本政府発行のIDカードを使うだけで、ゲートを通り過ぎ、そのまま飛行機に乗ることができた。

―移動距離をパスしますか？―

ゲームが聞いてくる。

―パスする。―

山際はマイクで答えた。正義は移動の連動モードで自動的に山際についてくるようにしていた。新幹線の正義は、能登島のEメールの記事にまとめていた。

「…父さん。犯行グループは日本人だよ。しかも隣の住人を除いて、他の部屋に入ってたのは全員犯人だ。」

「じゃあ大家は大変だな。ひと部屋を除いて、全部の住人が家賃も払わず消えた訳だ。」

言いながらゲーム内に持っている所持品の中から、ジョン ミッチェルに関するメモを山際はクリックした。

「アラスカ マッキンリーで登山訓練中か。乗り換え検索と移動距離パスで楽勝だな。」

山際はフト画面を回してプレイヤー正義を見た。場所はケネディ空港の中だ。現実と違ってアメリカ入国者は全て、この空港で降りなければならなかった。

自動で歩いている。そのそばに別のアメリカ人プレイヤーが近づいてきた。

一瞬で正義は抱き上げられた。アメリカ人は走り始めた。山際は追いかけるが叫んだ。

「正義ゲームに戻れ。誘拐されたぞ。」

山際は能登島が、身体能力のパラメーターを最高にしておきましたと言ったのを思い出した。

山際はグングン男に追いついてゆく。格闘モードの表示が出て、方向キー・テンキー・エンターキーの組み合わせで出る技のリストが、画面の端に並んだ。

アメリカ人は正義を抱えたまま、人気のない場所に山際を誘い込んでいった。

男は走るのをやめて振り返った。正義の頭にリボルバーを押し当てている。以下は英語のやりとりだ。

「ミスター山際。このままおとなしく、日本に帰れ。何を嗅ぎつけたか知らんが、やめた方がいい。」

「俺を知ってるのか?。」

「書かなくてもいい記事を書いて、掲載されない間抜け記者だ。」

「だったら自由に取材させてくれよ。掲載されないんだから?。」

「それ以上近づくな。息子の頭が吹き飛ばさぞ。」

「まあ、焦るな。誰に頼まれてゲームで遊んでる?。」

「知りたいか?。知りたいだろうが、教えるわけにはいかない。」

「あんたも、俺がどこでゲームをやってるか知りたいんじゃないか?。」

「教えてもらう必要はない。すぐにわかる。」

「ほう?。俺のPCの場所を追跡してるわけか?。ペンタゴンで?。ホワイトハウスで?。」

「クソツ。新幹線だと?。さすがは凄腕ジャーナリストだな。」

「こっちも、もうすぐお前のPCの場所が判るぜ。」

山際はハッターをかました。これぐらい古典的なハッターもないが、それだけに効果はあった。アメリカ人はフツと消えた。ゲーム内から自分のデータを消去したらしい。どうやるのかは山際には判らなかつたが…。

正義はドンと床に落ちる前に両足で着地した。

「父さん。バーチャル日本政府とリンクしてるから…多分PCの場所はわかったんじゃない?。」

正義もハツタリを効かしているのかと山際は思ったのでマイクを切った。正義も切る。

「それはハツタリか?。正義。」

「いや、リンクしてるのは本当だよ。バーチャル日本政府ならやってるはずだと思う。でも話しをするには戻らないと駄目だけど。」

「それはジョン ミツチエルに会ってからだな。…ゲームに戻るか。」

山際と正義はマイクのスイッチを入れて、ジョンのいるマッキンリー山に移動を開始した。現実のマッキンリーは単独登山が禁止されている北米の最高峰だ。冒険家の植村直己さんが消息を断った山でもある。

マッキンリー山のレンジャー事務所で、ジョンのベースキャンプはすぐに判った。

「16才の坊やだが。先物取引で4億円持ってるそうだ。それだけありゃあ、初登頂するかもしれねえな。」

レンジャーもプレイヤーで、この事務所で資金集めをしているらしい。レンジャーは備え付けの装備で山に登る事ができる。つまりそれで技術パラメーターを上げられるらしい。

「…ここだ。所持品リストに地図を移すといい。それでアクションすれば、ジョンのBCに行ける。」

「俺達の他にジョンを訪ねてきた人はいるかい?。」

「いや。あんたらが初めてだ。でもジョンと組むのは良いアイデアだ。俺ものせてもらいたいくらいさ。」

「のりゃあ良いさ。」

レンジャーは山際と握手して言った。

「オーケー、チームメイト。新K-0ノトジマ峰で会おう。」



「そつだな。」

山際はレンジャー事務所を出て、移動距離パスを使った。

CGだがマツキンリーは美しい山だった。そのパノラマを背景にジョン ミッチェルのベースキャンプは張られていた。

「父さん。さっきの奴がまた来るんじゃない?。」

「ハツタリが効いたんで、対策をやってるんだろう。今のうちにジョンの取材を終えるぞ。」

山際は、この騒動の発端にまさに触れようとしていた。

― 第13面ジョンミッチェルにつづく

## ―第13面ジョン ミッチェル

―第13面 ジョン ミッチェル

山際は一番大きなテントに入って行った。

大きなデスクがあり、マッキンリーの衛星写真をプリントアウトした地図にルートが書き込まれていた。その周りに無線と、気象情報を映し出しているモニターが取り囲んでいた。

そのモニターの前に居るやせた背の高い少年が振り返った。澄んだ青い目で山際を見つめると、満面の笑顔になった。(以下は英語のやりとり)

「ミスター山際。こんな所で会えるなんて!。」

ジョンは山際を抱きしめにきた。

「抱きしめるのは、どうやるんだ?。ジョン。」

「パラメーターの総合レベルが50を超えると、握手の他に選択肢が増えるんだ。…でも、ミスター山際がゲームにエントリーしてるとするのは取材ですか?。」

「アツシでいいよ。」

「オーケー。アツシ。」

「実はお父さんの取材について知りたくて来たんだ。」  
ジョンは暗くならなかった。

「そう。僕もだよ。パパの仕事仲間の人が、このゲームの中でパパのプレイヤーエドガーを見たと言う人が居るんだ。それで、パパの行方がわかるかと思って…。」

「このバーチャルアメリカで?。」

「ううん。バーチャルロシアの方で。でも海外に行くには登山技術レベルが100を超えないと駄目なんだ。アツシはもう超えてるん

だね。スゴイヤ。」

「記者つてのは、取材の為の特権を得るやり方を知ってるだけさ。でも初登頂する権利はないんだ。」

「わかるよ。そう言うの。パパもビックリするようなところに入りに来たからね。」

「パパが行方が判らなくなった時は、どこに行った時か判るかな？」

「ジエームス ロー博士にインタビューに行くと言ってた。歴史研究家の人だよ。アメリカが独立戦争をやった時のロシアの機密文書を古本屋で見つけたらしいって言った。」

「つながってきたな。正義メモってるか？。直訳で理解できてるか？。」

「誰？。」

「今そこに居るプレイヤー正義は、自動モードになってるんだが、俺の息子だ。ゲームの外で俺達のやりとりをメモってる。」

「そう。あとでゲームに入ってきてよ。挨拶したいから。」

「もちろんだ。で？。そのロシアの機密文書つてのは？。」

「それ以上は僕にはわからない。当時のスバイ関連のものらしいって、パパの友達は言ってたけど。」

「独立戦争時代の文書か…。どう去年の大統領選と繋がるか探り出さなきゃいけないわけだ。」

「ジョンは何かためらっているかのように間を置いた。」

「どうしたジョン？。」

「アツシ。パパからメッセージを預かってる。」

「手紙か？。」

「そうじゃない。ジエームス博士に会いに行く時に、パパにカセットテープを渡されたんだ。このカセットテープの中に入ってる言葉を正確に言えるように記憶して、テープは燃やすようにって。もしパパが行方不明になったらアツシヤマギワに、記憶した通りしゃべられて。日本語なんだ。」

山際は手でジョンを制した。

「ジョン。いま君のPCの場所はどこだ?。」

「マイアミだよ。友達の家族がクルーザーを持ってるんだ。それに乗せてもらってるんだ。」

「今、声の聞こえる範囲に人は居る?。」

「いない。沖に船を停めて、みんなは泳いでる。」

「その友達つてのは?。」

「ダグラス上院議員の息子だよ。」

現大統領民主党に対して、ダグラスは共和党の保守派議員と山際は頭の中で復習した。

「盗聴器があるかもしれないな...。」

「今朝、専門の人が来て1ダース見つけたよ。もう無いって言ったけど、ダグラス上院議員が、あと2つ見つけたよ。」

「...携帯電話持つてるか?。」

「携帯の電磁波で盗聴器の送信を妨害するんだね?。」

「ないよりはまし程度だが、やってくれ。」

「...。オーケー。」

「じゃあ、記憶してるメッセージを頼む。」

「ヤマギワ。これをジョンから聞いていると言う事は、私は死んでいる可能性がある。私が追っていたものの内容は知っているとと思う。ジェームス ロー博士が、独立戦争時代の本の中に挟みこまれていた、ロシアの機密文書を偶然発見した。それはロシアがある人物に対して発した任務を記したものだ。マイケル ハウゼン。当時はイギリスロンドンからアメリカに移住した男だ。彼に与えられた使命は、アメリカに移住し、独立戦争に勝つであろうアメリカで信賴を勝ち取り、孫以降の世代でアメリカ大統領となり、アメリカ政府を破壊せよと言うものだった。こんな文書がたとえ本物であっても問題などない。しかし、マイケル ハウゼンの子孫であるウェブ

スター ハウゼンは、現大統領の大統領選での対立候補だった。ジームス博士はこの事実を現大統領に知らせた。そして、ウェブスター ハウゼンがこの任務を果たそうとしている事実をつかんだ。しかし、マスコミに発表するには状況証拠ばかりだった。そこで、マクシミリアン エレクトロニクスに、ウェブスターを勝たせない為の工作をしてくれるよう頼んだ。しかし会長のテッドは、たとえアメリカが潰れても選挙は公正であるべきだと主張した。これが、この騒動の発端だ。」

ジオンは息を弾ませながら言いきった。山際は体が震えるのを感じた。エドガーは殺されている可能性が高いと感じた。

「…どう？。ちゃんと文章になってた？」

「パーフェクトだ。君のおかげで何が起こっているか知る事ができた。」

「パパの行方はわかりそう？」

「誰に追われていたかは判った。現大統領が知っている。必ずパパがどこに居るか俺が探り出す。ダグラス上院議員に保護を求めろんだ。父親が大統領に命を狙われてると言うんだ。」

「信じてくれるかな？」

「彼なら事実関係を確認した上で、必ず守ってくれるはずだ。」

「やってみるよ。」

「パパは必ず探します。俺を信用してほしい。」

「オーケー。でもバーチャルロシアには行ってみてもいい？」

「ゲームの中なら問題ない。」

「アツシはこれからどこへ？」

「いったんバーチャル日本に戻る。管理者とバーチャル日本政府にこの事実を伝える必要がある。」

「バーチャル日本に行けば会える？」

「会えるようにしておく。じゃあジオン気をつけて。」

「アツシも…。」

山際はバーチャル日本に戻る手順を操作するとゲームを抜けた。ど

つと疲労が山際を襲った。

とてつもない事件だ。しかしジョンの父親や能登島の命がかかっている。

「…退くわけにはいかない。」

新幹線は東京駅にすべりこんでゆく所だった。

―第14面エドガー ミッチェルにつづく

―第14面エドガー― ミッチェル

―第14面エドガー― ミッチェル

山際は停車する前に、正義を急がせてドアの前に立った。

窓から外を覗いていると、近づいてくる人物に山際は目を疑った。

新幹線が東京駅に停車すると、その人物がドアの正面で手を広げた。ドアが開くと同時に山際は弾かれたようにホームに出た。

「どうなってるんだ…エドガー?。」

日本語でエドガー― ミッチェルに叫んだ。ジョンとの会話は今さっきの事だ。

エドガーは英語でそれに答えた。

「心配かけたなアツシ。なんとか生き延びてるよ。…そっちは息子さんか?。」

「ああ…息子の正義だ。」  
190cm近い身長から長い手が差し伸べられて、正義の手を包んだ。

「アメリカ政府に誘拐されたんじゃないのか?。」

「逃げたよ。そのついでにロシア側の取材もしてきた。だが収穫はその前に取材したウェブスター― ハウゼンの故郷…ミネソタだ。」

「エドガー。ここで朝までしゃべってるつもりか?。」

「あゝそうだった。下沢 拓の館とか言うアパートメントが中野にある。今そこに隠れてるんだ。」

「下沢のマンションか…。俺もかくまってもらった事がある。」

「公安に追われたんだってな。勘違いで。」

「タクシーで行こう。駅は見張られてるぞ。」

下沢は部屋で待っていた。山際同様に資料室と化した部屋の中にエドガー 山際 正義 下沢と4人分のスペースが作ってあった。「で?。ミネソタの話をしるよ。山際が来てからだってもつたいぶるんだよ。」

下沢はハーパーの水割り3つとペプシ缶を持って来て言った。

山際は英語が解らない正義から取材ノートと鉛筆を取り上げた。

「じゃあいくぜ。スクープのハゲ鷹ども。」

エドガーの話はこんな感じだった。

電子投票の不正をしてまで勝たせるわけにはいかなかった、ウエブスター ハウゼン上院議員の故郷はミネソタにあり、祖父のマイケル ハウゼン5世は現在もそこに住んでいる。

エドガーはロシアのスパイ疑惑をマイケルにぶつける為に、ハウゼン家を尋ねた。

築100年以上と言う噂の大邸宅は、巨大な庭の中心にそびえ立って見えた。

門のインターカムのスイッチを押すと、執事と思われる男が用件を尋ねた。

「共同通信社のエドガー ミッチェルです。マイケル ハウゼンさんにお話しをうかがいたいのですが?。」

「記者の方ですか。主のマイケルは1969年以降新聞記者にはお会いになりません。どうしても言うのであれば、ウェブスター様に書面で質問状をお送りください。」

「マイケルさんはロシアにおいてになった事がありますか?。」

「ありません。当家の先祖はイングランドヨークより移住しました。代々誰ひとりロシアに行った事は有りません。お引き取り下さい。」

エドガーは警備員とドーベルマンを送られる前に門を離れた。

広大な敷地に沿って道がつけられていて、エドガーは敷地を一回り



してみる事にした。

5分程車で走ると、敷地にめり込むような形で家が建っていた。ハウゼン家と比べれば小屋程度だが、エドガーの住んでいるアパートぐらいの大きさはあった。

生け垣は崩れていて庭に居る老人が見えた。

エドガーはこの老人にマイケル老の事を取材してみた。

「あゝ？。マイケルか。アイツがどんな奴かつて？。一言で言やあ……ロシアのスパイさ。」

老人はよくあるジョークのように、イタズラっぽい目をしてそれを言い放った。

「……どうしてスパイなんです？。」

「孫に大スパイ　マイケル　ハウゼンの武勇伝を語って聞かせてるのさ。」

「それは……この辺りでは有名な話しなんですか？。」

「いゝやあ。俺だけが聞いている。その話しの面白いのなんのって、先祖がロシアのスパイで、その任務つてのが凄い。アメリカに移住して市民になりすまし子孫を大統領にして、アメリカを破壊するんだと。どうだ？。凄すぎて笑っちゃうだろう？。」

「聞いてるつていうのは？。ここに居ると聞こえるんですか？。」

「まさか。そんなに耳は良くない。ラジオに混じって聞こえてくるんだよ。ジャズ専門局の放送に……ウェブスターが3才の頃からな。」

「つまり。ウェブスター家の中の会話がラジオで聴けるとおっしゃる？。」

「そう言う事だ。どうなってるのか知らねえがな。あの豪邸は元々ハウゼン家の物じゃない。以前は株成金が住んでた。議員を買収してたとかでCIAが張り付いてた時があった。きつとその時のマイクと発信機が生きてるんだろ……でもマイケルのスパイ物語は面白いぜ。ラジカセのテープに録音してよく聞くんた。」

エドガーは体が震えるのを隠しながら、そつと言った。

「私にも聞かせてもらえませんか？。」

老人はニヤつと笑って言った。

「いいとも。」

「で、ラックに300本あったテープを全部CD・ROMに移したのがこれだ。」

エドガーはゼロハリバートンのトランクケース2つを、資料の山の上から持って来て、山際の前に置いた。

「つい最近のまでである。このカセット持ってた爺さんは、金持ちだが、テレビも新聞も見ない。30年前から…。ラジオのジャズ専門局はニュースを流さない。だから、このスパイ物語が現実だと言う事に気づかなかった。教えなかったから…今現在も。」

「完璧な訳か。」

「ああ。ロシア政府はもちろん、こんな任務がある事も知らなかった。ただし、モスクワに居たロシア史の教授は、この任務の当時の機密文書の写しを持っていて、ひとつのエピソードとして大学の授業で使っていた。誰も本気で、こんな任務をやり遂げようとしてる人間が居るなんて思わないから…。このお話しテープがなければね。」

「きつとその教授も授業で使いたいんじゃないか?。」

下沢が口を挟んだ。

「で。そのお話しテープをどうするつもりなんだ?。エドガー?。」  
エドガーの目が鋭くなった。

「山際。君に頼みたい。この2つのトランクケースは同じ物がそれぞれ入っている。ひとつはダグラス上院議員に。ひとつは現大統領に。俺はアメリカにもう一度入国するのは難しい。」

「わかった。ゲームにエントリーしてるか?。エドガー。」

「ああ。だから東京駅にいたのさ。君武さんに教えてもらった。」

「ジョンがマッキンリーに居るから行ってやれ。」

「本当か?。そういう所が山際だ。気が効く。」

エドガーが両手で山際を揺さぶったので、後ろの資料が崩れてきた。下沢が止めに入った。

「やめろ。資料の中で遭難するぞ。」

4人とも崩れてきた資料から抜け出すのに30分かかった。

―第15面ギフタワーマンションにつづく

## ―第15面ギフタワーマンション

―第15面 ギフタワーマンション

西堀はひといきPAに降りてきた電犯課のヘリの荷物室に乗っていた。吊り下げ式のベッドの上で、司老刑事が無線でやりとりするのを聞いていた。

大友は攪乱かくらんの為に別の刑事を乗せて三重県方面に走って行った。無線から白根と名乗る相手の声が聞こえた。

―向こうに着いたら身柄は防衛省に渡さなければならん。しかし西堀から離れるな。こちらの重要参考人だから離れるなど言われていると言え。それは防衛省側も了承している―

「ヘリは屋上で待機を?。」

―いかん。すぐに離れさせる。給油後に上空で待機だ―

パイロットは無線をヘッドフォンで聞いてうなずいた。

「他に注意する事は?。」

―防衛省の内部はアメリカ寄りと国内寄りに分裂している。これから行く、ギフタワーマンションの地下施設の責任者はアメリカ寄りだ。南3佐と副官2人に気をつける。それ以下の階級は、こうした分裂と関係していない。この3人を押さえれば問題ない。まだJリーグ部隊はギフタワーマンションの事を嗅ぎつけていないが…時間の問題だ。出来る限り南3佐を制してJリーグ部隊に備えろ―

「ハリウッドスターでもないのに…そんな事できますかね?。」

―ハリウッドだあ?。あんな田舎芝居なんて目じゃないぞ。きつと北野たけしが映画にしてくれるぞ。―

「ギヤグ満載で?。」

西堀も横山もパイロット達も笑った。

「いいぞ司老。その意気だ。ひとりも犠牲者を出すな。両手両足失っても生きて帰ってこい。命令だ。」

「あなたの部下で命令に従わなかった者は居ますか?。」

「おらん。だが、おまえが一番目にやりそうだ。」

「任せて下さい。」

「了解した。良い報告を待っている。」

無線は切れた。

司老は西堀を振り返った。

「西堀さん。聞いての通りだ。」

「どこもここも面倒抱えてますね。」

司老は眉毛を上げて答えた。

「人間が2人いれば、そんなもんは生えてくるもんですよ。なければ警官なんて仕事はなくていいじゃないですか。そんな事にいちいち悩んでたら生きてゆけません。」

「そりやそうです。」

司老は西堀の肩を軽く叩いて、パイロットの方に移動して行った。

横山が窓の外を見て言った。

「見えてきました。もう着きますよ。」

ヘリポートには完全武装の陸上自衛隊員40名と、南3佐と思われる将官とその副官ひとりが待っていた。

ヘリは西堀 司老 横山を降ろすと、すぐに上昇して行った。ヘリの風圧がなくなると南3佐は3人に近づいてきた。

「司老刑事。横山刑事。西堀栄一さん。ご苦労様です。南3佐であります。これは副官の野中3尉。西堀さんをお引継させていただきます。」

「上司の命令では、西堀さんに同行する事を防衛省は許可されたと聞いておりますが?。」

「もちろん構いませんが、銃器の携帯は遠慮していただきたい。そう言う南3佐の横から副官の野中3尉が進み出た。」

「拳銃をお預かりします。」

横山が抵抗しようとする前に、司老は横山の腹を手の甲で叩いた。

「わかりました。横山、拳銃を出せ。」

横山はしぶしぶ拳銃を渡した。

「司老刑事も?。」

「規則ですか?。」

「規則です。」

司老はわざとゆっくり拳銃をホルスターから抜いて、野中3尉の目の上にぶら下げてみせた。

「ホウ。いい銃ですね。手入れが行き届いている。」

「慎重に取り扱っていただきたい。壊されると困ります。」

「わかりました。大切に保管させていただきます。」

野中3尉は拳銃をそつとつかんで、司老の手からもぎ取った。

南3佐が司老の挑発をかわしにかかった。

「野中。失礼のないようにせよ。…司老刑事。非礼をお許し下さい。」

「

「いや。愛着のあるものなので。私も感情的になりすぎました。私の方こそ失礼をお詫びしたい。」

「ありがとうございます。では、こちらに…。」

南3佐はエレベーターの方に左手を差し出した。

野中3尉は手に持っていたスーツケースを床に置いて開くと、2つの拳銃を中に入れた。中のスポンジが銃の形に切り取られていて、スッポリとはまった。

(準備万端って訳だ)と司老は思った。

野中3尉はスーツケースを再び持ち上げるとエレベーターに向かって走った。

ポケットからキーを取り出すとエレベーター横の鍵穴に差し込んで回した。鍵穴の横には管理者用エレベーターとあり、一般の使用はできませんと書かれていた。

エレベーターの扉が開くと、横山に支えられて西堀が入り、司老が

入ったあと南3佐と野中3尉が入りボタンを押した。ボタンにはB5と表示されていた。

「質問の前にお答えしましょう。高宮さんの部屋は襲撃される可能性が高いので、内部の物ごと地下5階に移させていただきました。」

高宮さんと娘さんも、そこにおられます。」

「もうひとり居るはずですか?。」

西堀は驚いて言った。

「失礼。椎名美花さんも、もちろんおられます。」

「なら、いいです。」

西堀は南3佐に不信感を募らせた。

エレベーターはぐんぐん降下しデジタル表示がB5を示した。エレベーターを降りると、西堀が以前に見た7階とつくりは変わらなかった。南3佐が先導して表示のないドアの前で止まり、ノックした。ドアが開き高宮さんが出てきた。

「西堀さんと護衛の警視庁の方2名をお連れしました。」

南3佐がそう言って、3人を通した。

高宮さんは西堀を見て安心した顔をつくった。

「無事でしたか。連絡がないので心配しました。」

西堀は無言で部屋に入った。

「我々はこれで。」

と言う声かドアの外で聞こえた。

3人が中に入ると、高宮先生と椎名美花が西堀を見て立ち上がった。

「西堀さん。大丈夫ですか?。Eメールがないから心配しました。」

「展開が少し変わったんです。警視庁の刑事さんが味方についてくれまして。単独でやらなくて良くなったので、戻って来ました。」

美花は消耗した西堀と、力の入っていない右足を見た。

「右足、悪くなっていますか?。」

「さあ…。感覚があんまり無くなってきました。」

高宮先生の顔色が変わった。

「このフロアに軍医さんが居るんです。呼びますね。」

高宮先生は壁のインターフォンの受話器を取り上げて軍医を呼んだ。西堀はその間に美花に言った。

「美花さん。ゲームの中で能登島に会いました。」

「無事なんですか?。」

美花はじわつと涙が湧いてくるのを隠さなかった。

「無事です。神奈川の米軍キャンプ内に監禁されてるようです。監視付きでゲームにエントリーさせられて、協力させられています。能登島は、美花さんにゲームに勝って初登頂データと引き換えに、自分を救い出してくれるよう頼んできました。ゲームにエントリーして下さい。」

美花はパソコンのモニターを右手で指差した。

「もう入ってます。でも…まだ山は噴火中ですよ。どうやって登るんです?…。」

「バーチャル日本政府の君武さんと接触するんです。何かきつと方法がある。」

「わかった。やってみる…君武さんね?。」

美花は、モニターに向かってプレイヤー美花を自動モードから手動に切り替えた。軍医がやってきて後ろで治療を始めたが、美花はゲームに集中した。必ずノト君を救い出す。私の命に代えてでも…。奇跡を呼び込んでみせる。

美花はそう自分に言い聞かせた。

―第16面プレイヤー椎名美花につづく



## ―第16面プレイヤー椎名美花

### ―第16面プレイヤー椎名美花

プレイヤー美花は、ゲーム内で現実と同じプログラムの仕事を選択し、山登りの文章を打ち込んでいた。これにスポンサーがつき、登山の為の費用や道具は提供される形になっていた。

登山技術のパラメーターは、基礎トレーニングをやらずにリスク覚悟で山に登り、ゲーム内プレイヤー最高のレベルを真にもぎ取っていた。奇跡のように危険を回避してゆく様子は高宮先生の目にも、見事と言うほかなかった。

「ノト君のトラップは独特のリズムがあるの…20パターンあるんだけど、それにも法則があつて、集中してれば読み切る事ができるの…」

美花はそう説明した。

アメリカドリームチームはアメリカ政府に所属する形で美花を追っていた。

プレイヤーは200兆ドル以上と言う遺産のせいで、10万人に達して新しくエントリーする事が出来なくなった。この10万人が美花に注目していた。アメリカドリームチームが勝つより、日本の女の子が勝つ方がよほど面白いと誰もが思った。

おかげで登山隊を組む為にメンバーを選ぶ苦労はなくなった。よりすぐりのゲーマーが集まってきて、美花はそこから自由に選ぶ事ができた。しかし裏切りの可能性は消すことができない。最終的に初登頂を奪われれば失敗になってしまう。

美花は単独登頂に決めた。しかしBCに隊長が居ないと5000メートル以上の山は登れない。西堀がゲームをやれる状態ならいいが

と美花は思っていた。後ろで治療は続いている。

美花は東京に移動してバーチャル日本政府の首相官邸を訪ねた。現実とは違いアポなしでも問題ない。

入口の警備員にゲーム内IDと目的を告げると門まで君武さんが出てきた。なに事もなく官邸に案内された。

「で。何をしましょう?。」

部屋に通るなり、君武さんは聞いてきた。

「噴火を止めてください。出来るだけ早く登頂したいんです。」

「なる程。それは当然の要求ですが、我々には噴火をコントロールする事ができません。別のプログラムで動いています。」

「そのプログラムをコントロール出来ればいいんでしょう?。」

「管理者能登島が出来ないように作ったようです。」

「ゲーム管理システムにアクセスさせて下さい。これはゲームを守る事になります。けっしてゲームを破壊する目的ではありません。」

「なる程。微妙な話ですね…。確かに我々の目的と違わない。やれるかどうか美花さん自身が試してみますか?。」

「ぜひ。」

「では総理大臣執務室に行きましょう。」

君武は美花を伴って総理大臣執務室に移動した。

石川総理は美花を快く迎えた。

「では、こちらの奥の部屋にどうぞ。」

石川総理は壁のスライドドアを開いて、美花を促した。

そこにはパソコンがあり、モニターをクリックすると、マウスで打てるオンボードキーボードが表示された。

総理が言った。

「あなたの目的を打ち込むだけでいい。ゲーム管理システムがフェアと判断すればアクセスできる。アンフェアと判断すれば、あなたはゲーム内死亡になる。一発勝負です。やらないという選択も出来ますよ。」

「厳しいですね…。」

「ゲームとしては珍しい。しかし現実の世界では一発勝負なんて普通に有るんじゃないですか?。」

「そうですね…命に関わるなんて、そんなに有るわけじゃないです。」

美花は少し能登島をうらむ気持ちになった。

「では。私は外に出ます。ドアが閉まったら開始して下さい。止める時は、ドアに近づいてドアを開ければ止められます。ただし再入場は出来ません。」

「はい。」

美花の返事を聞くと石川総理は出ていった。

「なんだ。なんだよ美花。CPUがフェアだと判断するのは…。ゲームを守るため?。でもゲーム管理システムをプレイヤーが操作するのはアンフェアだよ。でも噴火を止めるのはどう?。準備ができてないプレイヤーにはアンフェアじゃない。ゲームの外で暴力をはたらいてる人が勝つのはアンフェアだよ。でも…ゲームの外の事はCPUは関係ない…。どうすんのよ…。」

後ろで声がした。

治療を受けている西堀の声だった。

「愛する人の命を救いたい。で充分だ。これ以上フェアな話しはあるか?。」

美花は西堀を振り返った。

「そうだね。アンフェアだなんて…誰にも…CPUにも言わせない。」

美花はオンボードキーボードに打ち込んだ。エンターキーをクリックすると、判断中の文字が出て、0から100%のバーを赤色の帯が横に動いて20%ぐらいで止まった。

部屋に居る高宮親子も、司老も横山もじっとモニターを見つめた。

西堀はソファアの上で、上を向いて目を閉じている。

軍医は傷の治療を終えて西堀に言った。

「右足は完全に折れてはいませんが、ひびが入っている可能性あります。ヒートセットギブスで固定しましょう。」

「それはここでやれます?。」

「出来れば処置室の方に移動していただきたい。」

「今、クライマックスに入ってるんで…お忙しくなければ待っていただきたいんですが?。」

「いいでしょう。私も同感です。」

軍医はモニターを振り返って言った。

― 第17面白根 登出動につづく

## ―第17面白根 登 出勤

―第17面 白根 登 出勤

白根は司老との無線連絡が終わると拳銃のホルスターを体に装備して上着を着た。デスクの引き出しからゴムバンドで頭に付けるライトを引きずり出した。

「部長？。どこに行くつもりです。」

次長の常盤 一平がモニターから顔を外して大声で叫んだ。

「横山の奥歯に発信機がしかけてある。ヘリで岐阜に飛んで救出に入る。ヘリにそのように言ってくれ。指令代行を頼む。」

「上には何と？」

「腹をこわして、トイレに行っていると言え。」

「わかりました。」

「それから、おまえは俺のものまねが出来るから、俺が指令室に居るように偽装しろ。」

常盤はエツという顔になった。

「なんで知ってるんです？。それを…。」

「常盤いいか？。電犯2部で生き残るには、この程度の情報収集ができんと話にならないぞ。」

白根は常盤の返事を待たずに部屋を飛び出して行った。

西堀と能登島の彼女がゲーム内に居ると、J部隊は場所を特定して襲撃に入る。南3佐にJ部隊から連絡が入れば2人が危ない。クライムズを解析するとPCの場所を特定するのに最短5時間が必要になると出た。そうすると、まだ2時間の余裕がある。ヘリで行って地下施設に侵入するにはギリギリの時間と白根は読んだ。

フロアの廊下を走っていると、前に5人程の集団が歩いて来るのが見えた。

その中心に居る男が白根を見た。

「白根。どうした?。」

平 純一警視總監。白根は急停止して敬礼した。

「はっ。自分は下痢でありまして、ただ今トイレに急行中でありま  
す。」

平警視總監は敬礼を返した。

「そうか。事件がややこしくなると必ず腹をこわす奴だな、おまえは…。急いで行ってこい。2部の指揮は戻るまで俺が執つてやる。心配なく用を足してこい。」

「はっ。ありがとうございます。安心して行ってこれます。」

「行け。」

白根は平警視總監の横を通り抜けけようとすると、また呼び止められた。

「白根。死ぬなよ。必ず生きて帰ってこい。返事はいい。行け…。」  
同じ事を言われたと思いつながら、白根はエレベーターに飛び乗った。

へりは常盤からの連絡を受けて、給油を終えると警視庁の屋上に降りてきた。

接地する前に白根はドアに走り込んできた。あわてて貨物室のドアをスライドさせると、白根は腹を乗せて上半身を入れた。

「行け。急げ。」  
と叫んだ。

貨物室のクルーが白根の体を引き上げてドアを閉じた。

「無線を貸せ。一班と二班を呼び出す。」

パイロットは怪訝な顔をした。

「部長。今指令室から一班と二班は岐阜駅内の鉄道警察連絡所前に集合するようにと…部長の声で指示を聞きましたか?。」

「ならいい。それは常盤のものまねだ。俺が指示した。」  
「それ。知ってみえましたか…。」  
「おまえが一番つけてたのも知ってるぞ。」  
「申し訳ありません。笑い上戸でありまして。」  
「それも知っている。岐阜駅前の駐輪場跡地に着陸できる。急げ。」  
「了解しました。」

白根は駐輪場跡地に降りるとフェンスをよじ登って岐阜駅に走った。ホームは二階にあり、下は飲食店や薬局などがある。

その一階に、もとは鉄道公安官の詰め所だった鉄道警察連絡所がKOBANという看板の下にあった。

すでに電犯一班二班10名が集合していた。

「よし聞け。いまから司老 横山兩名と重要参考人西堀 栄一 椎名美花 高宮幹雄 高宮愛の身柄確保を行う。」

白根は自分の携帯を取り出して開いた。

「ターゲットの位置は、横山の奥歯に仕掛けた発信機の電波を頼りに接近する。」

緯度 経度 高度が表示されていて、高度はマイナス28metreとなっていた。

「侵入口は？」

「このKOBANだ。この駅の地下は戦前に掘られた地下施設がある。国交省のスパイ事件捜査で拡張工事の際の地図を入手している。それによれば、岐阜タワーマンション地下からの緊急脱出口がここに有るはずだ。」

白根は鉄道警察連絡所に入っていた。中はさほど広くない。すぐにカウンターがあり、その左うしろにはロッカー、右側はアイオンカーテンで隠されていた。

「電犯2部の白根だ。聞いているか？」

カウンターに向かって書類を書いていた巡査が驚いて立ち上がった。「はい。平警視総監より指示を受けております。」

「よし。」

白根はアコーデオンカーテンで隠されている右側に入った。機械室とプレートが貼られた、錆びた鉄製のノブが見えた。

「くそ。開かんぞ。瑞穂、蝶番と鍵穴を撃て。俺の弾は温存したい。」

全員が退って挑弾に備えた。瑞穂一班班長は4発の銃声で鉄扉を外した。

「瑞穂。弾は補充しておけ。行くぞ。」

白根は茶色く変色した天井と壁を見ながら覚悟をきめた。

靴は滑らない底のブーツを履いている。頭にゴムバンドで固定するライトを付けた。

先頭で水垢にまみれた階段を慎重に降り始めた。

「間に合うか？」

後ろから10名の足音がついてくる。

「間に合わすさー」

白根は暗い昭和初期のトンネルの奥に向かって溶け込んでいった。

「第18面登山許可につづく」



## ―第18面登山許可

### ―第18面登山許可

モニターの赤いバーはなかなか伸びてゆかなかった。

しかしこれが幸いしていた。この処理の間アクセスは中断されていた。在日米軍座間キャンプ内で、プレイヤー椎名美花のPCの場所を探っていたCIAは中断を余儀なくされていた。西堀は処置室に移動して右足にギブスを処置されていた。帯状の樹脂を巻いていて、お湯をかけると固まるという物だ。

「軍医さん。あの南3佐というのはどんな人物なんです?。」

「この司令官です。それ以上の評論はすべきでないと思いますが?。」

「わかっています。」

「ご心配は分かります。南3佐は命令に忠実な方です。防衛大学は主席で卒業されましたが、演習中に命令を遵守するあまり、部隊を全滅させる事3回。まあ、演習ですから実際の死者はないんですが、実戦部隊の指揮からは外されました。それでこの司令官に配属されたわけです。南3佐を使うには、彼を知り抜いた命令を出せる将官が必要です。その将官に使われれば、彼に勝てる部隊は世界中に存在しないでしょう。陸自はここで彼を温存しているんです。」

「つまり。南3佐を敵にまわすと、やっかいだと言うことですか。敵にしない事です。敵にしたら逃げる以外に方法は有りません。」

南3佐はアメリカ寄りの進藤幕僚長の派閥に属しています。そこから命令が出れば、あなた方を拘束する可能性はあります。おそらくCIAがあなた方の位置を確認してないでしょう。南3佐はあなた方の事を報告するよう命令されていれば、派閥に報告するんでし

ようが、しないのが南3佐たるゆえんです。進藤幕僚長の派閥は警視庁とのやり取りを知らないポジションにいます。知っているのは南3佐だけという訳です。」

「物事が動かないと言つのは、そういうささいな事なんでしょうね……。」

「だから士気というものが軍隊には必要なんです。士気が高ければ誰かが気づく。アメリカの意図は自分達の士気を下げていますよ。大義名分が無さ過ぎる。」

「軍医さんは我々についてくれるんですか?。」

「実はアメリカ本体も割れているんです。大統領側とダグラス上院議員側と。首相官邸は様子見に入っています。でも防衛省と警視庁は大統領のやり方に、心の底から怒ってますから、本音はダグラス側ですよ。しかし勝った方につく。これが現実です。」

「わかりますよ。それは。」

西堀はやり切れない気持ちで右足のギブスを見た。

美花の前でモニターは30分動かなかった。そして赤いバーが一気に100%に達した。

出た表示はフェアでもアンフェアでもなかった。

「判断不能」

「コンピューターのクセして逃げるわけ?。」

美花はマイクに怒鳴った。

「それは誤解です」

「どう誤解なのよ。」

「それはフェアでもアンフェアでもないという事です」

「それでアクセスさせてくれないって事は、逃げるって事じゃない?。」

「当システムはプレイヤー椎名美花に対して、全面ではなく限定的アクセスを許可します」

「理由は?。」

「フェアでもアンフェアでもないからです」

「じゃ、限定的アクセスをお願いするわ。」

「どうぞ。文字でゲームの変更点を打ち込んで下さい」

美花は噴火停止と登山許可の発行を打ち込んだ。

「変更点を了承し、変更を行います」

「いつでも変更可能?。」

「ここにおいてになれば可能です」

「ここ以外は駄目なの?。」

「できません」

「じゃあ…また来るわね。」

「どうぞ」

美花は部屋を出た。

石川総理が待っていて美花に右手を差し出した。美花は総理の右手をクリックした。

美花がバーチャル日本政府の登山許可と、海上自衛隊巡視艇による新島アクセスの許可をもらって、首相官邸を出るのと入れ変わりに山際と正義が君武を訪ねてきた。

君武に一連の話を伝えると、CIAのPCの位置をつかんだ事を知らされた。

「ペンタゴンの他に座間キャンプです。山際さんの名前で、リアル日本政府にメールで伝えられるようにできますが?。」

「いや。直接総理に話したい。日本は日本国民の基本的人権と主権を優先すべきだ。」

「同感です。それはお任せしましょう。」

山際は東京駅近くのネットカフェを出て、地下鉄丸の内線で首相官邸に向かった。山際や一部の記者に知らされている電話番号でアポをとった。

その頃プレイヤー椎名美花は、プレイヤー西堀とゲーム中の巡視艇にいたかに乗っていた。

君武が同行している。不気味なのはアメリカドリームチームが同乗している事だった。

「あいつらもゲーム管理システムでなんとかできないんですか？。美花さん？」

「そこまで気が回らなくて…でも、さすがね。でござそう。」  
君武がドリームチームの方を見るように促した。

「能登島管理者がいます。ただし、もう我々と会話はできません。どうやらバレたようです。」

「じゃあ…ゲーム作者を敵にまわす訳かよ。美花さんと俺で…。」  
「でも、ノト君が居てもドリームチーム有利とは言えないです。や」と互角つてとこですよ。西堀さん。」

「互角ねえ〜。」

西堀は能登島を良く見ようと画面をズームした。しかしドリームチームのプレイヤーに遮られた。

## Ⅰ 第19面 新島

### Ⅰ 第19面 新島

新島は頂上を雲の上に埋めていた。

現実には有り得ない9kmの頂を持った島は、突然噴火をやめ有毒ガスの噴出も止まり、何千度もある温度もゲーム管理システムの変更により10度前後まで強制的に温度を下げられていた。

アメリカドリムチームも椎名チームも、一千万を支払って新島の衛星写真を所持リストに入れた。登はん斜面は4方向あり、北壁を登るルート 西から稜線を登るルート 南のクローワールルート 東の稜線ルート。その4つの中でも複数のバリエーションが検討できた。

美花は、もっとも登はん距離の短い、北壁の直登ルートを選んだ。第1キャンプから上は、全て岩壁の登壁になるが、天候さえよければもっとも早く登って、早く下りて来られるルートだ。そのかわり落石や風が強くなれば動けなくなつて遭難する可能性が高い。さらに設置したキャンプが落石で潰れる事もある。

アメリカドリムチームも北壁を選んで来たが、直登ではなく下の方の壁を迂回して、7km付近からスラブ登壁になるルートを選んできた。スラブは一枚岩でおうとつがない。指を掛ける場所がないので、全て懸垂で登らなければならない。スピードの低下と体力の消耗が早いリスクがある。ただし迂回する事でルート全体の傾斜角度が緩くなるのでスラブ以外では有利と見ていい。

「西堀さんはこのルートをどう見ます?。」

美花はマイクを切るように合図して、西堀に言った。

「…こっちは岩壁と氷壁のみでスラブ壁がない…7kmからスラブ

だと酸素不足で体力の消耗が激しい。上までルート探査できるかどうかだな……。」

「それはドリームチームは折り込み済みね……そこから先はこっちのルートと重なるから……彼らは私達が探査したルートで登る事ができる。ルート探査だけして確定しなければ……彼らも登れない。彼らがアタックキャンプに居ない時を狙っていけばオーケーね。」

6kmのBCベースキャンプから6千500で第1キャンプ。7千で第2キャンプ。7千500で第3キャンプ。7千900で最終となるアタックキャンプと美花は設営していった。

ドリームチームも美花と同じ30日でアタックまで設営した。しかし40名のパーティーの内半分の20名を失っていた。現実の登山なら撤退する所だ。残りも高度障害で5名しか動けない。

美花は慎重に高度順応と荷揚げを行った。アタックから先のルートは確定していない。BCで美花はギリギリのタイミングを計った。時間は24時間が24分で動いてゆく。1時間1分だ。

31日目に天候は悪化し始めた。アタックキャンプ付近で風速30mより下にさがらない。天候データ画面で気圧配置を確認する。低気圧が近づいてきている。雪も降りそうだ。

この低気圧が過ぎるのは食糧が尽きる60日目……しかし雪が降る前に風がやむ瞬間があると美花は読んでいた。風速が20m以下なら……美花のパラメーターなら動ける。

「西堀さん。ルートを確定します。」

「風が強くないか?。」

「アタックまでは20mです。行きます。」

美花はプレイヤー美花に5日分の食糧を持たせてBCを出発させた。ドリームチームは反応しなかった。これまでも陽動で第1キャンプとの間を往復させていたからだ。

第1キャンプに入る振りをして、すぐに第2キャンプに出す。第3キャンプに近づいた所で落石が発生したが美花は回避した。バイクぐらいの岩が目の前を落ちていった。

そこでドリームチームが反応した。動ける5名がBCを出た。美花は第3キャンプを通り過ぎ、アタックに無事入った。それが16時。ドリームチームはアタックまで入ると日没後になる。その前のキャンプで停止するのが普通だ。

「アタックまで行く。ノト君なら……。」

その通りドリームチームは19時にアタックに入った。その代償として5名の内1名が軽い凍傷と高度障害にかかった。

美花は頂上までのルートを確定した。これで登頂可能だ。

美花はアタックで待機して32日目に入った。ドリームチームの高度障害のプレイヤーは山を下り始める。朝6時の時点で風速は30m。天候は曇りで気温は-10度。美花は気圧配置をもう一度見た。風速が20mまで下がる。

「まだ。」

美花は言った。

しかしドリームチームのひとりがアタックを出た。7時にアタックの上は30mに戻った。別のプレイヤーが出て、動けなくなったプレイヤーと合流してアタックに戻す。そのプレイヤーは高度障害になり、動けるのは3名。風速は上がり続け40mで吹き荒れた。

33日目は6時から40m。7時には20mに下がった。しかし7時に出ると日没までにアタックに戻れない。ドリームチームも動かない。

34日目は30mで空は雲で覆われ始めた。気温は-15度。35日目の6時は40mで気温は-20度のまま動かない。

36日目はアタックキャンプの食糧が尽きる。アタックしなければキャンプを下りなければならぬ。風速50mが吹き荒れた。

しかし10時に20mまで下がった所で、西堀が強行した。アタックキャンプまで3日分の食糧を持って上がってきた。

「西堀さん。高度障害になってる。凍傷も中度だよ。」

「多分動くゲーム内死亡だな。でもここに居ると食糧が減るから下りるよ。」

西堀は美花の返事を待たずにプレイヤー西堀を下山させた。少し下った所で重度の高度障害になり動きが止まった。昏睡状態になりプレイヤー西堀はゲーム内死亡しました」と表示された。

西堀のモニターは強制的にゲームからログアウトさせられた。

「あとは頼むぜ美花さん。」

直接西堀は言った。司老 横山 高宮親子とハイタッチを交わして美花のモニターを見る側にまわった。

「無駄にしないよ。西堀さん。」

美花は勇気をもらった。

37日目の朝4時。

突然と風が10mとなり、5時に0mとなった。

雪が降り始めていたが、美花はアタックのコマンドをクリックした。この瞬間世界中でプレイヤー10万人が、観戦モードの画面に向かって

「ゴー。ゴー。ゴー。」

と叫んでいた。

美花自身も…。

↓第20面 頂上直下につづく



## ―第20面 頂上直下

### ―第20面 頂上直下

プレイヤー美花は7千900mのアタックキャンプを出た。持っているのは1食分の食糧。アタックに戻れなければ、プレイヤー美花はゲームから排除される。

雪は小降りで、風速は0m。7千900mからは雪田になっていて高度障害以外に危険はほとんどない。ドリームチームの3名も同時に出たがアタックキャンプが200m低い為に高度をかせげない。時間が7時 8時 9時 10時 11時で頂上まで100mに迫った。

ドリームチームはすでに10mまで距離を詰めて来ていた。

両者共に、ここで格闘する余力はない。ドリームチームは美花に追いついた。最後尾に自動追尾モードになったプレイヤー能登島が無表情で美花を抜いていった。美花になすすべはなかった。土気が同じなら人数の多い方がスピードで勝る。ドリームチームの勝利は間違いないかに見えた。

…しかしドリームチームは、あと50mの所で左側から予期しないプレイヤーに遭遇した。

老人だった。老人はザイルで繋がったプレイヤー能登島を両手で突き飛ばした。最後尾のプレイヤー能登島は自動の為にバランスをとらず斜面に滑落した。引っ張られた上の2人も転倒するが、ピッケルで制動をかけて滑落を止めた。

しかし老人は最後尾の能登島を持ち上げて下に投げようとし始めた。

先頭のプレイヤーが英語で絶叫した。美花のモニターに直訳の字幕スパーが出る。

「時間の流れが速すぎだな。戻そう」

「時間が1分のゲーム内時間がリアルタイムに減速していった。この老人はゲーム管理システムに全面アクセスしていると美花は感じた。

「あなたは誰ですか」

「私ですか。私はテッド マクシミリアンです」

「なんだって。テッドは死んでいます」

「CIAの皆さんは 私のPCを捜しているんですよ。私はCPUテッド マクシミリアンです」

「すぐに場所を割り出しますよ」

「間にあわないですね あなた方はゲーム内死亡です」  
テッドがプレイヤー能登島を下に向かって投げた。

上の2人もこらえるものの、耐えきれず引きずられてゆく。先頭に居たプレイヤーがテッドの足首をつかんだ。

「アメリカを潰すつもりですか」

「民主主義を破壊する選挙不正を見過ごすのならアメリカが存続しても意味がない」

「それによって どれだけの被害が出るかを あなたは考えないのか」

「ワシントンDCの連中が困るだけだ 彼らは そこに居てはいけないのです」

「それなら聞きます ロシアの特務が大統領になっても良いのか」  
「それは証拠を揃えて国家反逆罪で処理すべきだ やり方が違います」

「間に合わなかったのです」

「間に合わなければ、ルールを破って良いのですか」

「非常事態です」

「それならば 民主主義という おとぎ話は止めたらどうですか



4人はからまりながら落ちてゆき、次第にスピードを上げていつて数百メートル下の斜面で停止した。4人は動く気配はなく、しばらくして消えた。ゲームから排除されたのだろう。美花は、あとは登るだけだった。あと70mを上がり始めた。がつ。

今度はゲームの外でトラブルが発生した。

「椎名さん。とりあえずゲームから抜けていただきたい。」  
入り口を見ると南3佐が拳銃を構えて美花を狙っていた。

― 第21面 生還への70mにつづく

## Ⅰ第21面生還への70m

Ⅰ第21面 生還への70m

南3佐の両脇ななめ後ろで、2人の副官も西堀と高宮親子、司老と横山を威嚇している。

美花は仕方なくプレイヤー美花を斜面にビバークさせ、ゲームを抜けた。8千900mでは1秒長くいればそれだけで死亡する確率が高くなる。自分のツキを信じる以外にすることは、この命令馬鹿の3佐の前で美花は思いつけなかった。

「素直に従っていたら助かります。他の皆さんも同様をお願いします。いざとなれば、椎名さんを射殺する権限を持っています。」

「日本人だろ。アメリカの手先になるのか。」

西堀は両手を上げて言い放った。南3佐が美花を撃つつもりである事を西堀は感じとっていた。

「アメリカの為ではありません…日米の為です。」

南3佐は美花に引き金を絞った。西堀は後ろから美花を押し倒しておおい被さった。

初弾は西堀の頭の横で唸りを上げてかすめた。2弾目をかわす術はなかった。

西堀は現実の死を覚悟した。

白根は開け放たれたドアの外で銃声を聞いて動いた。頭のライトを外してドアの中に投げ入れた。

南3佐が体ごと振り返った。体を低くして突っ込み、銃を持っている右手をつかみ体を入れて、柔道の一本背負いに持っていった。南3佐も兵士で格闘の訓練は受けている。返し技に持っていったが、白根の方が上だった。さらに、それを返して南3佐を転がしながら倒れている西堀と美花の前に南3佐を盾にして立った。転がり込む間に南3佐のブーツに仕込んであったナイフを抜き取り、首筋に押し当てた。

「言わなくていいと思うが：動くな。」

白根は副官の2人に向かって威嚇した。

副官は銃を床に落とした。

「司老も横山も、銃をとろうとするなよ。この2人はプロだ。」

白根は手詰まりを感じた。南3佐を抑えている為白根は動けない。素手とは言え2人のプロに対して4人の素人に刑事が2人：無傷では済まない。部下の10人は廊下で他の自衛官を牽制している。

ドアから数人が入ってくるのを白根は見た。

「来るな！。手を出すんじゃない。」

白根はジリジリする思いで心臓が躍った。

「白根。そこまでだ。ナイフをはずせ。」

平警視総監が軍服を着た人物を従えて言うのが見えた。

「こちらは陸上自衛隊栗林幕僚長だ。日本政府は、今回の日本国内でのアメリカ政府機関の活動に対して協力しない事を決定した。」  
栗林幕僚長がそれに続けた。

「それを踏まえて、防衛省は南3佐の特殊作戦の終了を決定した。  
南3佐、ご苦労だった。」

白根はゆっくりとナイフを首から外して南3佐に渡した。

「白根刑事部長は、今の部署に就かなければ柔道の日本代表になっていた逸材だ。彼に抑えられても恥ではないぞ、南。」  
そう栗林に言われて南3佐は道理でという顔をした。

「南3佐。これより日本国民救出の為に、防衛省は全面協力する。」

椎名さんをゲームにお返ししろ。」

西堀は白根に抱き起こされながら、このカメレオンのような連中は何だろうと思っていた。

美花は西堀が上から居なくなると、素早くパソコンに戻った。ゲーム内の時間は止まらない。初登頂しても生きてベースキャンプに戻らなければ、遺産は手にできない。

西堀は栗林に向かって質問した。

「私の会社の仲間がアメリカ側に拘束されています。なんとか救いたいんですが?。」

「西堀さん。アメリカ政府は椎名さんが手にする遺産と引き換えに、全員の安全を保証すると日本政府に約束しました。あなた方はそのつもりかと思えますが?。」

「ええ。そのとおりです。でも…なぜアメリカは、その交渉に応じません?。」

平警視総監が答えた。

「山際 厚というジャーナリストが、現大統領の対立候補だった人物がロシアの特務機関だった証拠をつかんだんです。1時間前にその証拠のコピーをダグラス上院議員とアメリカ政府に、日本政府を通じて渡されたのです。その結果、選挙の不正は不問に付される事になりそうです。そのかわり、選挙不正の隠蔽の為に被害を受けた人々の現状復帰を行う事をアメリカ政府が約束するという事になりました。」

その話を背中であきながら、美花はモニターを見つめていた。12時45分プレイヤー美花は9千mジャストの頂に立った。氷が張り付いた小さな岩が頂上だった。その岩に立つと眼下の雲がちぎれ始めて、その下の太平洋が現れた。太陽にきらめく波のもようが9千m下で揺らめいていた。

「ノト君らしいね。こんなの…きれい。ありがと。好きだよ。無事でいて。」

部屋に居る全員が、その言葉にモニターを見つめた。

「美花さん。降りないと。」

西堀が我に帰って言った。

美花は下山をプレイヤー美花に始めさせた。しかし、軽い高度障害がいつ中度に変わるか…やはり上に居る時間が長すぎた。アタックキャンプに20mの所で中度の高度障害に変わった。速度が落ち凍傷までも中度に上がった。なんとかアタックキャンプに転がり込んだ。この状態で下山すれば、キャンプを出た瞬間に重度の高度障害になり動けなくなって終わる。しかし、キャンプにはアメリカドリムチームの面々が待ち受けていた。

高度障害でBCにいた15名が回復して美花のアタックに登って来ていたのだ。

「椎名さん。あなたを死なせはしません」

ドリムチームは美花を交代で背負って一気に山を下った。17時20分に美花はベースキャンプに生還した。ベースキャンプのモニターの中にお祝いのメッセージがスクロールしていた。ドリムチームのプレイヤー達に、プレイヤー美花は祝福のキスと握手責めに合っていた。その様子をモニターの中に見ながら、美花は何度も敵だった彼らにアリガトウを繰り返した。

同時に美花が操作していたパソコンにデータが送信され始めた。平警視總監がゲームの終わりを宣言した。

「それが、アメリカ政府に渡すテッド マクシミリアンの遺産のリストデータです。我々は見ない事になっている。全員ここを出ましよう。CIAがこのパソコンを運びだせば、この悪夢はすべて終わりです。」

西堀の小さなため息が美花の胸に響いた。

「第22面 バックホームにつづく」





## 1 第22面 バックホーム

### 1 第22面 バックホーム

西堀は軍医に肩を貸してもらいながらドアの外に出た。

外には平警視總監 高宮親子 椎名 白根 横山 司老が待っていた。

「高宮さん。すいませんでした。こんな事に巻き込んでしまつて。そう言う西堀に、高宮も娘の愛も気にする事は無いと言う顔をしていた。」

「良いんです。私は元防衛庁の人間で、これほど派手ではないんですが、省庁間や海外との騒動は何度も見て来てるんですよ。何度やっても懲りる事を知らないんですよ。国家組織というものはね。」  
「でも：7階の部屋は飛び込まれて銃撃戦になつたつて、軍医に聞きましたか：。」

「まあ。南3佐が最初から見越して、部屋の中の物をここに移動させてた訳ですから、いまさら驚く事もないでしょう。」

西堀は高宮さんの懐の深さに驚くしかなかった。

「西堀さん。これからどこに？」

高宮先生がケガをいたわるように聞いた。

「軍医に岐阜大学病院に連れて行ってもらいます。多分入院になると思います。」

「病室が決まったらEメールして下さいね。お見舞いに行きます。」

「我々も寄りしてもらいますよ。連絡していただかなくとも、こつちで調べて行きますから。」

白根が笑いながら西堀に言った。

西堀は美花を見た。

「美花さんは、どうするんです。」

美花は疲れ果てていた。危うく射殺される所だったのだ。しかも狙いをつけられてだ。仕方ないと西堀は思った。

「…ノト君が解放されるはずなんだけど。まだ、どうなるかわからないから。平警視總監と神奈川に行つて、待機です。」

高宮先生が美花を抱き寄せた。まだ能登島と美花の悪夢は終わっていないのだ。西堀は忘れていた事に気づいた。

「そう言えば、うちの会社の社員はどうなるんです。」  
平警視總監が言った。

「巡洋艦は横須賀に入ったそうだ。チャーターしたバスで会社に戻る事になっている。…椎名さん、そろそろ我々は能登島の所に向かいます。」

椎名は高宮先生に小さく手を振つて、平警視總監のうしろについて歩き始めた。

「美花さん。能登島によくやったつて、西堀が言つてたつて伝えて下さい。」

美花は振り返つて笑つた。

「西堀さんも頑張りましたよ。」

「それを言うなら美花さんも。」

「ええ。お見舞いに行きますね。ノト君と。」

美花は廊下の角に姿を消した。

最後に白根が、西堀と軍医を見送つた。

横山が白根の前で、直立不動で敬礼した。

「どうした横山?。」

「はつ。プロの警察官の仕事を見せていただき、ありがとうございました。」

白根は司老を見て苦笑いを送つた。

「横山。違つぞ。プロの警察官の仕事ではない。プロの人としての

仕事だ。警察官はあんな事をしてはいかん。」

「はい。」

そんな横山を見て司老が言った。

「でも。あんな事をしない奴は電犯課2部には必要ない…でしょ？。部長？。」

「そのとおりだ。人でない者に電犯課2部の仕事は勤まらん。よく覚えておけ。」

「はい。」

白根は横山を頼もしく感じた。

「よし。司老 横山。疲れている所すまんが次の任務だ。1時間前に中部国際空港に元KGBのニコライスキーが降りた。3班がすでに張り付いてる。すぐに応援に入れ。」

「了解しました。部長は本部に戻れますか？。」

司老は白根が南3佐との格闘で右肩と右足首を痛めた事に気づいていた。

「馬鹿モノ。星が近くに居るのに、東京に行つてどうする。」

「ならばテーピングさせて下さい。動けるうえに悪化させないようにあります。」

「そうか。横山。先に行け。後から追いかける。」

横山が走り去った。

「司老。どうしてわかった。」

足首にテーピングしながら司老は白根を見ずに言った。

「刑事ですから。」

「馬鹿野郎。」

司老はさらに右肩にもテーピングをほどこすと、白根と共に横山を追った。

それと入れ替わりにCIAの要員がこの騒動の原因を運び出す為に入ってきた。長い1日が終わりを告げ、新たな長い1日が始まりを告げた。

Ⅰ 第23面 キャンプ座間 正面ゲートにつづく

## ―第23面 キャンプ座間正面ゲート

―第23面 キャンプ座間 正面ゲート

エドガーのトランクをアメリカに運んで、一週間後に山際は成田空港に戻ってきた。コピーではなくオリジナルが反逆罪の立証に必要だった。ウェブスター ハウゼン上院議員は逮捕された。マイケル ハウゼン5世はロシアへの亡命を希望して自宅にたてこもり、事態をややこしくしていた。日本国内では事件は終わったが、ここからが勝負だと山際は当たりを入れる先を幾つか思い浮かべていた。空港の外に出てタクシーを拾おうとしている山際のそばに、白いカローラが近づいてきた。中から「山際」と呼ぶ声がある。見ると白根刑事部長が中に見えた。

「とりあえず乗れ。話はそれからだ。」

「…似合いませんね。白いカローラ。」

山際は言いながら、自分でドアを開けて乗り込んだ。

「どうしちゃったんです？。よくわかりましたね？。成田に居る事。」

「任務だ。調べてわからん事は我々にはない。」

「はあ。任務だから乗せてくれたんですね。」

「当たり前だ。記者なんぞ乗せたらロクな事がない。」

「で？。どちらまで？。」

「まあ聞け。今から5時間後に神奈川のキャンプ座間正面ゲートから、能登島秀彦が解放される。インタビューはナシだ。写真を撮れ。カメラは持つてるな？。」

「待って下さい。何故それを私に？。」

スクープだ。と言う言葉を飲み込むと、山際は頭に血が登ってゆくのを感じた。

「借りだ。」

意外な言葉が出た。

「白根さんが私に借りですか?。」

「勘違いするな。警官は記者なんぞに借りなど感じん。お前らは居るだけで邪魔だ。…だが人としてお前に借りを返す。」

「人として?。」

「そうだ。お前がロシア特務の証拠を持ってなければ、よくて6名最悪なら15名の命が失われていた。その中に俺の命もある。いいか。警官としてでなく、人として借りを返す。」

「わかりました。ならば私も人として、これを頂きます。」

「なんだと?。スクープ屋が。」

「同じですよ。記者として受け取ったら、警視庁の都合が悪い記事が書けなくなるじゃないですか。」

山際は笑いながら言う顔を見て、白根も笑った。

「この野郎。おしいな。山際。警官になってりゃ俺の部を任せられるのにな。」

「白根さんも記者になってりゃ、もつと世の中を良くする事ができたものを。」

2人はそこで爆笑し始めた。車は東名高速に入っている。

「…しかし山際。引退したら一杯やるうや。」

「引退ですか?。お互い引退するのは死んだ時ですから、地獄で煮え湯で乾杯ですね。きっと美味しいですよ。」

「コイツ。本当にそうなるぞ。」

2人はこんな調子で神奈川まで走っていった。

白根は時間ちょうどにキャンプ座間正面ゲートを望む良いアングルで狙える場所に車をつけた。

「米軍の許可は取ってある。セキュリティは来ない。一応俺は護衛だ。」

「誰が迎えに?。」

ゲート前に一台の黒い公用車が停車している。

「平警視總監とその護衛2人。椎名美花という女性：能登島秀彦の恋人だ。」

「全員入れていいんですか?。」

「ゲートと全員を入れる。車も入れていい。ナンバーは写ってたら掲載する時に消せ。全員了解している。：これは能登島の意向でもある。お前に感謝していると伝えてくれと言ったそうだ。本当はアメリカ大使館での引き渡しだったが断った。いつ状況が変わるか分からん。もらえる時に即座にもらうとアメリカ大使に首相が言ったそうだ。」

「そんなに微妙な話なんですか?。」

「能登島がCIAを訴える事もできる。訴えればまた騒動になる。そのリスクをアメリカが負う事で誠意を見せた。能登島もそれで沈黙を守るそうだ。」

「気に入らない。」

山際は頭の中で吐き捨てた。しかし自分と恋人の安全を保つにはそれしかあるまいとも思った。

「来ましたね。」

正面ゲートにアロハシャツにジーンズの男がひとり出てきた。公用車のドアが開いて、まず護衛が出てきた。護衛が開いたドアから平警視總監、続いて白い服の女性が出てきた。

能登島は立ち止まって山際の方を見た。そして全員が山際の方を見た。

山際はイラクでも震えた事のない手が震えるのを感じた。強い意志で震えを止めるとニコンのシャッターを切った。

白い服の女性が能登島にゆっくり歩み寄ると、顔をまじまじと見た。そしてゆっくり手を首に回すと能登島の胸に顔を埋めた。



続けてフィルムがなくなるまで、山際はシャッターを押し続けた。声が流れてきた。

「すまない。何もできなくて。抵抗したけど向こうはプロだった。」  
「そんな事ない。ゲームは最後まで頑張ったよ。負けなかったよ。私達アメリカに勝ったんだよ。」

「違うよ。勝ったのはフェアだ。アメリカじゃなくアンフェアに勝ったんだ。いつも負け負けのフェアがアンフェアに勝った。みんなで頑張ったからフェアを勝たせる事ができたんだ。アメリカにはアメリカのフェアがある。日本には日本のフェアがある。俺達みたいな一般市民のフェアもある。それぞれがそれぞれのフェアに配慮すればこんな事にならないのに…。そうすれば戦争だってなくなる気がするよ。」

「そうだね。きっとそうなるよ。」  
2人は平警視總監に促されて公用車の中に消えた。

山際はフィルムのなくなったニコンのシャッターをまだ押し続けた。いた。

「フフ…。山際、お前でもそんな風になるんだな。」

白根は見せた事のない優しい顔で言った。山際はハッと気づいてニコンを下ろした。

「白根さんもそんな優しい顔が出来るんですね。」

「人だからな。お前も俺も。警官や記者である前に。」

「だったら世の中を良くするのは人かもしれませんね。警官や記者や政治家や兵隊や社長や重役じゃなく。」

「おもしろい事言うな。じゃあ肩書きなんて辞めちまうか？。困るぞ。仕事が出来なくなる。」

「ちゃんと休めばいいんでしょう。休みに人に戻って考える。だから日曜日があるんですよ。」

「お互い休みなんてあるか山際？」

「ないですね。でも休みを作りますよ。白根さんは無理でしょうけど。」

「働きながら休むさ。」

「それは御自由に。」

白根はいつもの顔に戻った。

「送ってゆく。どこがいい。」

「新幹線の横浜駅に。」

「帰るのか?。」

「まさか。東京に戻って、このネガを持ち込みますよ。」

「全国紙の一面スクープか?。」

「全国紙?。そんなもんじゃないですよ。これは明日の世界中の新聞の一面を飾りますよ。」

「驚いたな…。そんなに凄いのか。これからは山際さんと呼ぶか?。」

「山際でいいですよ。これは事件関係者全員力で得たスクープです。私は何もしてません。」

白根は右手をハンドルから離した。

そして、その手を頭に持ってゆき、敬礼した。

それは、白根の最大の賛辞だった…。山際はその姿を目に焼きつけた。

― 最終面 山際家の作業小屋につづく

## ―最終面 山際家の作業小屋

### ―最終面 山際家の作業小屋

事件から3年後。山際厚 山際正義共著でニューグリップタイヤ株式会社社員失踪事件の謎というタイトルで本が出版された。事件の核心に触れる事はできなかったが、丹念に取材された事実によって書かれたこの本は200万部を超えるベストセラーになり、山際家に時ならぬボーナスをもたらした。当初エドガー ミツチエルも著者として入るはずだった。しかし身の安全を保証するために、事件についてコメントしない事をCIAと取引した為に名前を入れる事はできなかった。ただし印税に関してはエドガーの提案で三分の1づつを分け合う事で決着した。

山際は本で使えなかったメモをひとつひとつ読み返していった。ニューグリップタイヤ株式会社は知名度を生かして、クライムズをリトライできるようにし、プレイしやすいように改良して業界のトップに躍り出た。

能登島は解放後、ゲームクリエイターに復帰するまで2年を要した。監視をごまかして西堀や山際と会話した事がバレた時に暴行を受けていた。その精神的な外傷は深刻なものだった。約束通り椎名美花は事件の翌年クリスマスに能登島美花となりプログラムの仕事で夫を支え続けた。高宮親子を始めとする周りの支援があった事は言うまでもない。

西堀栄一はニューグリップタイヤを退社しスポンサーをコーディネートする会社を設立した。その会社で大友康洋とレース活動を行っている。

電算機犯罪課2部は活動内容が事件後明るみに出してしまった為廃止

され、別の名前で白根を中心に同じ活動を行っている。

高宮親子は7階の部屋をJ部隊に破壊されたが、アメリカ政府によって現状復帰され同じ部屋に住んでいる。

中島勝義もネットカフェ20店舗すべてJ部隊に破壊され、自らも肋骨3本と左足を折られ、一年間入院を余儀なくされたが、同じように店舗すべて現状復帰され、治療費用と生活費をアメリカ政府が支給した。

山際はメモを見ながら正義に問いかけた。

「この事件をどう総括する？。正義。」

正義はしばらく考えていた。手にはゲートの前でこちらを見ている能登島と椎名美花の写真があった。

「…これは戦争だったと思うよ。フェアとフェアが戦う。でもその間から降り注ぐ悲劇に襲われる人々の事を想うなら。…フェアだと言っ前にするべき事があるような気がするよ。」

山際は写真の能登島の悲痛な顔が発するメッセージを思った。

「それを…知らしめるのがジャーナリズムの使命だな。」

山際はメモのファイルを一番新しい棚の中に収めた。

―後書きにつづく

## ―後書き

### ―後書き

まず最初にここまで読んで下さったあなたに感謝します。

これはこのサイトにアクセスされている方には不要だと思いますが、この作品に登場する団体 組織 その名称は実在のものとは関係ありません。また岐阜駅の地下周辺に地下施設が存在する事実も証拠もありません。鉄道警察連絡所の中に地下に通じるドアも存在しません。中をのぞき込むなどして、公務を妨害する事のないように大人の対応をお願いします。同じように岐阜タワーマンションは岐阜シティタワー43とは無関係の建物ですのでよろしくお願いします。さて。本作は修正が多くご迷惑をおかけしました。9面の時点でタイフーンアイの総アクセスを上回り、投稿を急いだあげくの惨事となりました。次回からは、すべて携帯に打ち込んだ状態で投稿を始めたいと思っています。1話目が出てくるまで時間がかかると思いますが、出ればテンポよく出せると思いますので、御了承下さい。前書きで作者の主題に対する想いをと書きましたが、能登島 美花 白根、西堀に言われてしまったのであらためて書くまでもないような気がします。

でも、武上溪の言葉で書いてみます。

公正フェアにこだわらず、すべての立場の人間は、すべての立場に配慮しないと悲劇が生じると言うのが作者の捉え方です。公正フェア、拡大して正義にこだわって、それによる被害を仕方ないと割り切る事がテロをする側とされる側、戦争を行う国と国のトップに立つ人々の心理的トリックなのでは？と言う考え方で本作を描きました。降りかかる火の粉は振り払わなければなりません。が、その火

の粉を舞い上がらせている遠い原因が自分達にあるかもしれないと思う事が必要だと言う事です。もしあるのなら、火の粉を舞い上がらせない方法が見つかるはずだと作者は考えるのです。白根が人としてと何度も口にしています。このキャラクターなら何と言うだろうと考えたら出てきた言葉です。人として考える。この言葉にすべて集約されるような気がします。あなたはどう感じられたでしょうか？。

さて。本作は能登島を主人公で始めた訳ですが、場所を特定されている能登島をCIAが放置しておかないだろう…そこからサブキャラクターがメインに活躍する話になってしまいました。ゲームの内と外に、3つのストーリーが進行すると言う、私は誰？ここはどこ？と確認しなければならぬ話になってしまいました。西堀が高宮 愛と恋をすると言うアイデアがあつてそれらしい流れもありましたが、愛のキャラクターに作中で見事に拒否されました。作者としては愛に幸せになって欲しいと思ったのですが、仕方ありません。収穫は白根というキャラクターで、元々山際と事件現場で会話する刑事というだけの人物でしたが化けてくれました。いつか、白根を使った特編別班なんでもあり課白根節が炸裂みたいなシリーズをやってみたいなと思っています。

実に説明の多い小説でアクセスがそのうちなくなるかもしれないと思つてました。書いてる方も、なんてつまらないんだろう死にそうになつたりもしました。しかし優しい読者の皆さんのおかげで、アクセスがゼロの日はなく、勇気づけられました。

次回作はジャンルをその他ではなく恋愛にしてお届けするつもりです。タイムスリップ多次元宇宙を使った、切ないラブストーリーになる予定です。

では次回作でお会いしましょう！。

2007年11月9日

武上溪

ー作者からお詫び

本作において単語表記の間違いがありました。

前書き部分とー第1面部分で、シミュレーションとしなければならぬ所をシュミレーションとなっていました。

細かい事ではなく導入の重要な部分で、がっかりされた読者の方も多かったと思います。さっそく訂正させて頂くと共にお詫びいたします。指摘をして頂いた読者さんには、ありがとうございますのひと言です。こういう読者さんが作者にとって宝だと思っています。

作者としてはないように努力しますが、また有るようでしたら指摘して頂きますようお願いいたします。

(この文章は本編に掲載したものを移させて頂きました)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6903c/>

---

クライムズ クライシス

2010年10月9日00時20分発行